

琉球大学学術リポジトリ

トーガニ〈恋歌〉の分類

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2009-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 玉城, 政美, Tamaki, Masami メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9971

トーガニ〈恋歌〉の分類

The Classification of TOGANI “a Love Song”

玉 城 政 美

TAMAKI, Masami

はじめに

抒情歌謡の表現する内容と構造を《自らをとりまく環境との関係のなかで、抒情主体の心に生じる、個々の状態》とおおまかに規定しておくことにする。

〈抒情主体〉とは作者のことでなく、作中で「私」として指示される人物のことである（たとえば抒情主体は、恋する男や女、家族の死を嘆く妻や夫、旅人、家郷に残る妻、老いを嘆く人、老いて意気盛んな人、しみじみと過去を回想する人、若さを謳歌する人、客に酒や歌舞を勧める主、祝宴に招かれて祝辞を述べる客、酒宴で未長い交友を誓う人、任務地を離れていく役人、島に残される旅妻など、さまざまに性格づけ＝役柄化されていて、この項目自体が、抒情歌謡の重要な分析対象である）。抒情主体をとりまく環境にはどのようなものがあるか、その構成要素を列挙する必要があるが、恋歌で抒情主体が関係する主要な環境は〈相手〉と〈状況〉であろう。相手との関係のなかで、抒情主体の心に生じる感情＝恋心が、恋歌の構造上の中心軸となる。そしてもう一つの軸は、抒情主体をとりまく状況である。抒情主体は、作中の設定された状況のなかに存在し、この状況のなかで、あるいはこの状況にたいして、なんらかの心を表現している（恋歌では抒情主体のおかれた状況を直接的に描き出すことは少ないが、抒情主体の心の動きや状態から推測できることが多い）。相手や状況との関係のなかで、抒情主体に生じる心は、個別具体的には、①一目見たばかりの彼女が忘れられない、②私の愛を受け入れてください、③あなたの愛を受け入れます、④私はあなたを諦める、⑤結ばれたばかりのあなたへの愛が深まっていく、⑥もっと深く私を愛してください、⑦二人の心は死ぬまで変わらない、⑧あなたは私を愛していないのではないか、⑨私を捨てないでくだ

さい、⑩あなたと離れているのが辛い、⑪彼女に会うために人目を避けて通っていく、⑫彼の訪れを待っている、⑬やっとあなたに会えて嬉しい、⑭あなたと別れていくのが辛い、⑮私のことは諦めてください、⑯あの方は心変わりしてしまった、などの形で表現されている。個々の作品に表現されたこれらの心は相互に差別的であるが、これらを共通する特徴に基づいてまとめあげる必要がある。

多様に展開されている、恋歌の心进行分类するために、最初の基準として、抒情主体と相手との〈恋愛関係の成否〉の観点を設定してみた。二人の間に恋愛関係が成立しているのか、まだ成立していないのか、成立後に破綻したのかということ、関係のありかたのもっとも大きな差異であるし、それは心のありかたの大きな差異をも示すであろう。恋愛関係の成否の観点からすると、トীগ二の恋歌は、1 関係の未成立の歌、2 関係の成立の歌、3 関係の破綻の歌、の三つのグループに大きく分類することができる。それぞれのグループの間では心に大きな差異がある。また、それぞれの内部においても心の差異があるので、分類をさらに進める必要がある。この大状況のなかにはさらに小さな状況があって、そのなかで抒情主体は異なる心を持つものとして表現される。しかし、このことを状況が抒情主体の心を一方的に規定すると考えるべきではないだろう。なぜなら、同じような状況であっても異なる心を持つこともあるので、状況だけではなく、そこには性格も絡んでいるのであろう（たとえば〈一時的な離別〉の状況のなかで、相手のもとへ通いたがる心、相手の訪れを待つ心、面影を浮かべて辛く思う心など、同じ状況のもとでも異なる性格があらわれている）。抒情主体の性格（＝個々の心から判断される性格）と小状況の相関のありかたにしたがって、心の動きや状態はさらに区分される。1 〈関係の未成立〉のグループは、(1)関係する相手が存在しない〈相手不在〉の歌と、(2)関係の成立を願望しながらも相手に伝えず自分の胸中におさめている〈思慕〉の歌と、(3)関係を成立させるために相手にはたらきかける〈求愛〉の歌と、(4)関係が成立する以前に破綻した〈失恋〉の歌と、(5)求愛を受け入れる〈受諾〉の歌がある。2 〈関係の成立〉のグループは、(1)相愛の歌、(2)一時的な離別の歌、(3)愛の葛藤の歌に区分される。さらに(1)相愛の歌は①愛の始まりの歌、②愛の

告知の歌、③愛の確認の歌、④讚美の歌、⑤秘密の歌、⑥愛の不変の歌に、(2)一時的な離別の歌は①恋人と離れている局面の歌、②恋人のもとに通う局面の歌、③恋人を待つ局面の歌、④恋人と会う局面の歌、⑤互いが離れていく局面の歌など、より小さな局面に分割された心によって区分される。(3)愛の葛藤の歌は①評判、②対立（主張と反論）、③眠い罪はあなたが被れ、などの歌に区分される。

トーガニ〈恋歌〉の分類は次のようになる。

1. 関係の未成立

- (1)相手不在
- (2)思慕
- (3)求愛
- (4)失恋
- (5)受諾

2. 関係の成立

- (1)相愛（①愛の始まり②愛の告知③愛の確認④讚美⑤秘密⑥愛の不変）
- (2)一時的な離別（①離れている②通う③待つ④会う⑤離れていく）
- (3)愛の葛藤（①評判②対立③眠い罪はあなたが被れ）

3. 関係の破綻

- (1)未練（愛を断ち切れない）
- (2)未練（今でも自分の恋人だと思っている）
- (3)未練（成す術がない）
- (4)素知らぬ顔をするな

第一章 関係の未成立

抒情主体と相手との間に恋愛関係がまだ成立していない状況のときに、抒情主体の心に生じる感情の動きや状態には(1)相手不在、(2)思慕、(3)求愛、(4)失恋、(5)受諾がある。(1)相手不在は、恋する対象がいない段階であり、(2)思慕はまだ恋心を相手にうち明けていない段階であり、(3)求愛は相手の心を獲得するため

のはたらきかけであり、(4)失恋は相手の心を獲得できなかった結果のあらわれであり、(5)受諾は相手の求愛を受け入れるものである。

第一節 相手不在

恋愛関係が未成立の段階にあるときの、心を表現する第一のタイプは、相手不在の歌である。琉歌では、恋する相手のいないことを嘆く心を表現する事例が多いが、トーガニでは、思慕する相手を手に入れるまでは恋の思いは止まないのだと、恋に対する強い意欲を表現した歌があるだけである。恋する相手を手に入れるまでは恋への意欲は休まることがないというのが、この歌群の主題であるが、恋する相手が眼前に存在するような設定になっていない。一例だけ、恋する相手に呼び掛ける形を取っているが、そのばあいは「求愛」の歌になる。それ以外は「相手不在」の歌として分類することにした。

1 恋の意欲

恋の意欲を表現する歌には、抒情主体の設定は男女いずれのばあいもある。すべて、男（女）というものは、相手の異性を手に入れるまでは、恋しい感情が止むことはない、という恋する人間の特性を表現した類歌である。干瀬に打ちつける波または浜辺に打ち寄せる砂と恋する感情を対比する構造の歌である。前半に自然現象を後半に人間の心を配置した、自然対人事の対比構造である。前半の自然の構成要素には①干瀬の波、②海の砂、③花などがあり、後半の人事には①恋する異性を手に入れられない限り止むことのない心（＝恋心）、②思いを実現するまで貫く心（恋心／人生の理想）などがある。最後の事例は「思う肝（思う心）」という言葉の意味を恋心の意か、人生の理想の意か、解釈が微妙に分かれるところである。

(1)干瀬の波＝男心

干瀬に打ちつける波は、そこで砕け散って終わるのではなく、浜辺に打ち寄せて終わるのである。これが自然の法則であるが、これと同じように、男である私は恋する女を抱いて心が静まるのである。干瀬の波が浜辺に到達するのが

当然であるように、恋する男は相手の女を抱くことではじめて心が静まるものである。男の、恋に対する意欲を表明した歌である。

[資料1]

干瀬んな 折 浪であむど	干瀬に打ち碎かれる波でさえ
浜や うち やばんまもの やうい	浜を打ち止もうものを
ばんの びきりやや	わが男は
おもゆる ヲならよ	思う女を
だけど やばむ やうい	抱いてこそ止むよ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね62)

[訳] 干瀬で折れ碎ける波でさえ浜辺を打って止むものだ。男の私も愛する乙女を抱いて気が静まるのだ。

[資料2]

比瀬んな ぶりうい んがまちやーんどよ
浜や 打ちやだな 止ばみちや 無あーんよ
我ん 男りやー まーん 思ゆそ 女を 抱かだな
止ばみや 無やんーよ

(『西原民謡集』43)

[訳] 干瀬で折れ碎ける波でさえ浜辺を打たずに止むことはない。男の私も愛しく思う乙女を抱かずに気が静まるということはないよ。

[資料3]

比瀬んな 折 (ぶ) りうい 浪ちあんどよ
浜や 打ちやだ 止ばみちや 無 (に) やんよ
我ん 若者 (にせや) まん
思ゆそ 女 (ぶなり) を 抱かだな
止ばみちや 無やんよー

(『西原民謡集』16)

[訳] 干瀬で折れ碎ける波でさえ浜辺を打たずに止むことはない。若者の私も

愛しく思う乙女を抱かずに気が静まるということはないよ。

次の事例は、干瀬の波対男心という構造は同じであるが、思う女を抱く主体が複数化されている。恋する相手を手に入れようと秘かに決意するというのではなく、男性集団の中で、男の特性を確認し合っているふうである。なお『城辺町史』の注に「沖立つ波でさえも、目ざす浜辺にその身を打ちあげてからその動きを止めるという。さて、私たちも、見染めた娘をぜひ息子の嫁に迎えて、親としての心配事を止めることにしよう。キーワードは「止める。」「ダキドウ「抱いて」。ここでは、嫁を迎えること。」とあり、恋の当事者の歌でないという解釈をしているが、類歌などから考えても、抒情主体は恋の当事者、抱くは抱擁の意に解釈するのが妥当であろう。

[資料4]

サーヨーイー	サーヨーイー
びしな ぶり マーン	干瀬のところで折れる
なムがまじゃムどうよー	波でさえも
ばまや うちどう	浜を打って
やばんさ むぬよーいー	止むという
ばんたまい マーン	私たちも
うむゆる ぶなりやや	見染めた乙女を
だきどう やばまでいよー	抱いて（迎えて）止むつもりだ

（『城辺町史』38）

[訳] 干瀬で折れ砕ける波でさえ浜辺を打って止むものである。私達も愛しく思う乙女を抱いて気が静まるのだ。

[資料5]

瀬（びし）んなぶりふー	瀬に打寄せる
波（なん）がまどんまよ	波は
浜や打ちちゃだな やまんなむぬよ	浜にきつと打ち上げる
どゆたまい あはらぎ姉がまう	わたくしも（吾われも）美しい娘を

抱きだなやまいん

抱かずに諦めてなるものか

(『伊良部村史』50)

[訳] 干瀬で折れ砕ける波でさえ浜辺を打たずには止まないものである。自分達も美しい乙女を抱かずには気が静まらないのだ。

干瀬の波に対して女心を託す事例がある。「思う女」を「思う男」に入れ替えれば、抒情主体が女性の歌になる。

[資料6]

びしな ぶり マーン	干瀬のところで折れる
なムがまどうムまよー	波でさえも
ばまや うちどうよー	浜を打って
やばムま むぬよー ヨーイ	止むという
ばんたゆまい マーン	私たちも
うむゆる びきりゃ	見染めた若者を
とぅりどう やばまでいよー	婿にとって止むつもりだ

(『城辺町史』37)

[訳] 干瀬で折れ砕ける波でさえ浜辺を打って止むものである。私達も愛しく思う男を手に入れて気が静まるのである。

(2)海の砂=男心

前半の構成要素を干瀬の波から白砂に取り替えると、あらたな類歌となる。北の海の白砂は波が打ち返してから静まる、という性質を恋の意欲と対比する構造である。

[資料7]

にしの いむの しなむなごまいよ	北の海の白砂は
かいすば うち やばん ものやうい	打ち返し打てば止むものよ
ばんの びきりやまい	わたしの男も
おもゆる ヴなりを だけ やばむさよ	思う女を抱き止むよ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね61)

[訳] 北の海の白砂も波が打ち返してから静まるものである。私は男として愛する女を抱いて気が静まるのである。

(3) 思う肝=恋心

干瀬の波に対比する心を「思いを通す」と表現するばあいがある。類歌から推測すると「思い」は恋心の意かと考えられるが、「人生の理想」のような意味がないかどうか、それも否定しがたい。『城辺町史』の注に「沖立つ波でさえも、目ざす浜辺にその身を打ちあげてからその動きを止めるという。さて、私も、いつかはきっと長年の夢をかなえて、幸せになるつもりだ。予祝歌。」とある。この説明は、この歌を「恋歌」とは解釈していないことを示している。

[資料8]

びしな ぶり マーンニュ	干瀬のところで折れる
なムがまじゃん イラユマーンニョー	波でさえも
ばまや うちどう	浜を打って
やばムま むぬよーいー	止むという
ばムまい イラマーン	私たちも
うむゆる キむや	胸中の思いは
とうーしどう いかでいよー	通していくつもりだ

(『城辺町史』39)

[訳] 干瀬で折れ砕ける波でさえ浜辺を打って止むものである。私も愛しく思う心を貫き通していこう。

[資料9]

サーヨーイ	サーヨーイ
びしんユ ぶりゆーゆ	干瀬に折れている (砕けている)
まーん なんがまじゃーんどうヨ	ほんとうに 小波でさえも
やちいんユぶり	ヤチ (海中に突きでた岩) に折れる
なんがまじゃーんどう	小波でさえも
ヨーイ	ヨーイ

しろはまや うちゆ まーん	白浜を打ち ほんとうに
しばなやうていどう	白花になってぞ (になるまでは)
やばんなむぬ ヨーイ	やむことがない ヨーイ
ばんたまいゆ まーん	わたしたちも ほんとうに
うむゆい いちいむゆば	思っている肝 (気持ち) を
とうーしどう	[相手に] 通して (伝えるまでは)
やばまでいヨー	やまないでいよう

(『日本民謡大観』14)

[訳] 干瀬で折れ砕ける波でさえ、海中に突き出た岩で折れ砕ける波でさえ、白浜を打って白い花になって止むものである。私達も愛する心を貫き通して気が静まるのだ。

(4)花が咲く=思いを通す

庭に生えている花が時期を待って咲くということと、自分たちの思いを通すという心が対比されることがある。『城辺町史』は「庭の花木でさえも、「時季」を待って花が咲くという。私たちも、日頃の思いは、いつかきつと実現したいものだ。恋歌、または予祝歌。」と述べている。恋歌とも人生の理想を歌ったものとも解釈できるという立場のようである。

[資料10]

サーヨーイー	サーヨーイー
にわんにゆ うい うる	庭に生えている
ばながまじゃーみよー	花木でさえも
ズぶんな まちーどう	時季を待って
ばなや さきていみよーい	花が咲くという
どうーたーまい マーん	私たちも
うむゆる きムや	胸中の思いは
とうーしどう やばまでいよー	通して止みたいものだ

(『城辺町史』33)

[訳] 庭に生えている花でさえ時期を待って花が咲くという。自分達も胸の思

いを貫き通して静まりたいものだ。

第二節 思慕

恋愛関係が未成立の段階にあるときの、心を表現する第二のタイプは、思慕＝片思いである。思慕の歌は、相手にたいするはたらきかけ（告白）をさしひかえて、自分の内面を内省する形で心を表現する。

思慕の歌は①話してみたい、②姿を一目見たい、③夜になると思いが倍になる、④いっしょになりたい、⑤手に入れたい、⑥独占したい、などという心を表現する。

1 話してみたい

『城辺町史』によると「マダダウナダラ」は実在の地名で、「砂川集落の北西寄りの平地一帯だという」。そこにはトゥーズムガギナの草が一面に生えている。その草に木綿花を咲かせて、綿花を共に摘みながら、恋しい彼女と会話をしてみたいものだ、という心を表現している。恋心の初期段階である。

[資料11]

まだだうなだらぬ	マダダウナダラの
とうーズムがギなんによー	トゥーズムカギナ（草名）に
むみんばながまぬ	木綿の花を
さかさゆ	咲かそうよ
マーンイヨーイー	まことに
うイ むイがツなん	その花を摘みながら
うむーゆイ ぶなりやがまとう	思っている女性と
ばなしや みゅーばーよー	話がしてみたいものだ

（『城辺町史』114）

[訳] マダダウ平地のトゥーズムカギナ草に木綿の花を咲かせたいものだ。ああ、それを摘みながら愛しく思う彼女と話してみたいものだ。

2 姿を一目見たい

恋しい人の家に設けられた水甕に小石を投げ落として、その音を聞きつけた娘が表に出てくる姿を一目でも見たいという心である。娘の姿を一目見るだけで満足しているのであるから、二人は関係の成立した仲での出会いの合図を示す小石の音でもなさそうである。あくまでも娘をおびき出し一目姿を見ればそれですむ関係である。これも恋心の初期段階である。

[資料12]

ばがやらば いしなごじんがまよー んみがまもぎゃが
みずがみんかいおてろよ おりがならがまつきい
んみがまもぎゃが いでいこーば びとみーみいでよ
(『伊良部郷土誌』28)

[訳] 私が投げたら、小石よ、シミガマモギヤ娘の水甕に落ちろ。その鳴る音を聞いてシミガマモギヤが出てきたら、一目見たいものだ。

3 思いが倍になる

日没後に時間状況を設定して、六月の日照りの暑さと彼女への恋しさを対比する。日照りの暑さと恋心とは「日没→忘れる／日没→思いが倍加する」と対照的な構造となっている。

[資料13]

るくがツ びゃーりぬ	六月の日照りの
あつさがまうばよー	暑さは
ていだや すいどう	陽が沈むと
わすりや すーがよーいー	忘れてしまうが
ぶなりゃが くとうゆばー	乙女のことは
ていだや すいどう	日が沈むと
ばいしゃくんな うむーよー	その思いが倍加する

(『城辺町史』99)

[訳] 六月の日照りの暑さは太陽が沈むと忘れられるが、乙女のことは太陽が沈むと思いは倍になる。

4 いっしょになりたい

「好きな男性との結婚を乞いねがう乙女の歌」（『城辺町史』）であるが、生活を共にすることを「着物を下げる物干し竿が一つになる」と表現する。

[資料14]

いつぬ かぎ あしゆまん	いつの良き
ピカズんからがよー	日から
いつぬゆ ちゆら	いつのめでたい
ピカズんからが	日から
マーンニョー イー	まことに
キン さぎ ざうがまぬ	着物を吊す物干し竿が
すでい さぎ ざうがまぬ	袖を吊す物干し竿が
ピていつ ならでいがよー	一本になるだろうか

（『城辺町史』93）

[訳] 何時の良い日から、何時のめでたい日から、ああ、着物を下げる物干し竿が、袖を下げる物干し竿が、一つになれるだろうか。

「いっしょになりたい」という心を「北極星」との対比で表現する事例がある。北極星は、夏も冬もその位置を変えないことから、不変という属性がある。また一つ星であるから、一つという属性もある。次の事例の、彼女の心は「変化しない心」と表現されているが、これをどう解釈すればよいか。「相変わらず自分を愛してくれない彼女」なのか「ずっと変わらず愛してくれる彼女」なのか。前者であれば「彼女が振り向いてくれるのをひたすら待ち続ける思慕の歌」ということになり、後者であれば「二人は相愛関係だが周囲に障害があって、いっしょになれない」ことを嘆く歌と解釈される。

[資料15]

夏冬変らぬ ねのぼの星小（ぼすがま）よ
朝夕変らぬぶなりやが心小よ
何時（いつ）がみんなが ぶなりやと僕（ぼん）とや

共（びてつ）んならでがよ

（『伊良部村郷土史』3）

[訳] 夏冬変わらない北極星よ、朝夕変わらない彼女の心よ、何時になったら彼女と私はいっしょになれるのだろうか。

「いっしょになりたい」という心を「青天・白雲」を用いて表現する事例がある。遠隔地を表現するのに「青天の下・白雲の下」を用いて、その遠い、広大な場所まで出かけてあなたを待っている、そしていっしょになりたいと願っている、という心を表現する。思慕の強さを表現する。

[資料16]

青天（あうていん）がまぬ	下（すた）がみまい	青空の下までも
白雲がまぬ	下がみまい	白雲の遠い 果てまでも
待ちちぎど	行かてど	待って行こう
一緒（すとみ）と	ならてど	一緒になろうと
くがりや居（う）い		焦がれているのだ

（『伊良部村史』35）

[訳] 青空の下までも、白雲の下までも、待ち受けに行こう、いっしょになろうと、焦がれている。

[資料17]

青天がまの	下がみまいヨ	青空近いところまで行っても
白雲がまの	下がみまいヨ	白雲近いところまで行っても
待ちちぎど	行か	（お前となら）時期を待って、
一身と	ならてど	一体となろうと
くがりや居る°	ヨ	待ち焦がれているよ

（『宮古民謡選集』2）

[訳] 青空の下までも、白雲の下までも、待ち受けに行こう、いっしょになろうと、焦がれている。

[資料18]

あうていんがまぬゆ	青天の
スタがみまいよー	下まで
すすふうむがまぬ	白雲の
スタがみまいよーいー	下まで
まーつきどう いかでいよー	連れそっていくよ
ピとうみどう ならでいていどう	一つ身になろうと
しがりや うりゃーよー	苦悶しているんだもの

(『城辺町史』57)

[訳] 青空の下までも、白雲の下までも、待ち受けに行こう、いっしょになろうと、焦がれている。

[資料19]

あうでいんがまぬ シたがみまい	青天の下までも
しらくむがまぬ シたがみまい	白雲の下までも
まっちやぎどう いかていどう	一緒にいようとって
すとうみどう ならていどう	共になろうとって
くがりや うい	思い焦がれている

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ21」)

[訳] 青空の下までも、白雲の下までも、待ち受けに行こう、いっしょになろうと、焦がれている。

5手に入りたい

次の事例は類音のつながりで構成されている。戌と縁はイン、子と根はニ、寅は取るに通じるが、類音を含む取るの語はここでは用いられておらず、意味的に「抱く」という語につながっている。内容は愛する乙女を抱きたいというものであるが、語呂合わせ的な要素からすると、あるいは笑いの歌であろうか。

[資料20]

いんぬいいがまんないんな ちいきヨー 戌の日には縁が付き

にぬいいがゆーんな	にーや	ふましヨー	子の日の夜には根を踏ませ
とうらぬいいがまん			寅の日には
うむゆすぶなりゃが	まふじいゆ		思っている女の真首を
ていーすりだかヨー			手を添えて抱こう

（『日本民謡大観』11）

〔訳〕 戌の日には縁が付き、根の日の夜には根を踏ませ、寅の日には思う乙女の真首を手を添えて抱こう。

次の事例も愛する乙女を抱きたい、というものであるが、前半との関連性がはっきりしない。

[資料21]

サーヨーイー	サーヨーイー	
びきだツ	にしえいや	独り身の若者は
ゆまたぬ	ばんていムどー	四辻の番人だそうだ
みーだツ	ぶなりゃや	独り身の娘は
うらざぬ	ばんていムどーよーいー	裏座の番人だそうだ
いつがゆ	あし まーん	いつになったら
うむーゆる	ぶなりゃゆ	意中の娘を
だきや	みゆーでいがよー	抱けるだろうか

（『城辺町史』86）

〔訳〕 独身の若者は四辻の番人だという、独身の乙女は裏座の番人だという。何時になったら愛する乙女を抱けるだろうか。

次の事例は「もしも、私が好きな娘をめとることができたら、一生懸命働いて、たとえば水田の稲や開墾地の粟が豊かに実るように、豊かで幸せな家庭を築いてみせるよ。」（『城辺町史』）と、愛する乙女を手に入れることができたばあいの、将来の夢を語っている。「あらか」とは「新開け（新たに開墾した畑地）」の意。土地の活力があるので、豊作が期待できる。

[資料22]

サーヨーイー　　サーヨーイー
うむゆい　ぶなりゃが　　見染めた娘を
とうらりちからよー　　手中にできたら
ぬずみゆい　ぶなりゃが　　好きな娘を
だかいちからよーいー　　抱くことができたら
みづたぬ　まい　だき　　水田の稲が実るように
あらかぬ　あわ　だき　　開墾地の粟が実るように
でいきどう　みしでいよー　　でかしてみせるよ
（『城辺町史』89）

[訳] 愛する乙女が手に入れられたら、望んでいる乙女が抱けるなら、水田の稲が実るように、開墾した畑の粟が実るように、でかしてみせるよ。

6 独占したい

次の事例は競争関係にある他人を想定して、相手の女性を独占したいという強い意欲を表現している。

[資料23]

ばが　いきふんぶシぬ　　わたしが行って踏みたい
あにがまが　やーぬ　じゃオよー　　姉さん〈恋人〉の家の門よ
とうんかり　いきふんぶシぬ　　振り返って行って踏みたいものだ
きぬ　したみちがまよー　　木の下の道よ
ピとうんな　ふまさだ　　他人には踏ませないで
ばん　たうかーし　　わたしひとりだけ
ぶんだり　みしでいよー　　通いたいものだ

（『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ22」）

[訳] 私が行ってみたい姉さんの家の門よ、振り返って行ってみたい木の下的小道よ。他人には踏ませないで、私一人を通してみせよう。

第三節 求愛

恋愛関係が未成立の段階にあるときの、心を表現する第三のタイプは、求愛である。求愛の心は、思慕の段階よりも一歩進んで、相手に自分の心を表明し告白する段階である。

求愛の歌は①あなたを見たい、②あなたに惚れている、③讚美、④会うたびにあなたへの愛が増す、⑤あなたを忘れられない、⑥岩もあなたの船に見える、⑦受け入れてほしい、⑧あなたを愛する心は不変、⑨あなたと相性が合う、⑩あなたを抱きたい、⑪結ばれる運命、⑫願掛け、⑬長期に渡る愛、⑭難題もこなす、⑮強奪、⑯男の特性（干瀬の波）、⑰あなたの子供がほしい、などという心を表現する。

1 あなたを見たい

隣近所の家であれば、毎日会うことができるが、「見つめて暮らしたい」「見惚れて暮らしたい」という願望を表現した歌が次の事例である。そして、眼前の相手に「あなた」とはたらきかけることのできる設定であるから、求愛の意志表示でもあるだろう。

[資料24]

ウラゝ あが やーとうや	あなたの家と
とうない しゅーらまー	隣であつたらなあ
かなしゃいよー	カナシャよ
かなしゃが やーとう	カナシャの家と
さとうや しゅーらまーよーいー	同じ里であつたらなあ
みーんかいちやな ばやよー	見つめて暮らし私は
みどうりやいちやな	見惚れて暮らし
みぬ ふうすい すーまーよー	目の薬にしたいねえ

(『城辺町史』108)

[訳] あなたの家と隣であつたらいいね、愛しい人よ。愛しい人の家と同じ里であつたらいいね。私は、あなたを見つめて、見惚れて、目の薬にしたいよ。

あなたを見るために門前で夜を明かした、という告白も、自分の愛の深さを強調していて、求愛の歌となる。

[資料25]

つヴあう みーぬふしゃがまんどうヨー	あなたを見欲しさに（見たさに）
うむゆすぶなりやう	思っている女を
みーぬふしゃがまじゃーんどうヨー	見欲しさ（見たさに）
つヴあがやーぬヨ かぎじゃうがまんな	あなたの家の美しい門で
ゆーや あかひやうちいヨー	夜を明かしたのだ

（『日本民謡大観』8）

[訳] あなたを見たさに、愛する乙女を見たさに、あなたの家の美しい門前で夜を明かしてしまったよ。

2 あなたに惚れている

惚れた相手にはなんらかの敬意を持ち、仰ぐような態度を示すものであるが、その惚れた度合いの著しさを「目釘の折れた鎌が上を向くように」と比喩的に表現する事例がある。目釘とは、ここでは鎌の刃を柄に固定する釘のことであり、それが折れてしまって刃が上を見上げるさまをいう。ひたすら仰ぐのみという印象を与える。

[資料26]

ウう あんにゆ ぷりていや	あなたに惚れたのは
ただぬゆ ぷりやー あらんによー	ただの惚れ心ではないよ
かなしゃん ぷりていや	カナシャに惚れたのは
しょーしょーぬ ぷりやー	少々の惚れ心では
あらんによーいー	ないよ
まら ぶり イあらぬ	目釘の折れた鎌の刃が
あばなキ にやーんどう	上向くように
あばなキ ぶり ういよー	上向いて見惚れているのだよ

（『城辺町史』74）

[訳] あなたへの惚れ方はただの惚れ方ではない、愛しい人への惚れ方は少々

の惚れ方ではない。目釘の折れた鎌の刃が上を向いているように、上を向いて見惚れているよ。

3 讚美

相手の容姿を讚美する形で求愛する歌がある。長い髪を垂らした後ろ姿、前から眺めた顔の美しさ、それらが私を落とし入れる乙女よ、このような讚美の言葉で求愛しているのである。

[資料27]

ちびから みりば
ながうさでい ぶなりゃがまよ
まいから みりば
みーまゆちゆらよ ヨーイ
ばん たらすい マーン
びきりゃ たらさ
ぶなりゃがまゆ マーンヨ

(『上野村の歌謡』4)

[訳] 後ろから見ると長い髪の乙女よ、前から見ると顔の美しい人よ、私を惚れさせる、男を惚れさせる、乙女よ。

[資料28]

ていびから みーや	尻(後)から見れば
ながだい あにがま	長垂れ(髪の美しい)姉さん
まいから みーや	前から見ると
っしみゃーぬ あにがま	染めやの(一目惚れにする)姉さん
ばぬ ふらしぬ	わたしを惚れさせる
にしゃや ふらしぬ	青年を惚れさせる
っシーみばな あにがま	白い顔の姉さん

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ33」)

[訳] 後ろから見ると髪が長く垂れた姉さんよ、前から見ると一目惚れさせる

姉さんよ、私を惚れさせる、青年を惚れさせる、白い顔の姉さんよ。

次の事例は男性を讃美する歌で、抒情主体は女性である。男性の美を表現する手段として、外見を桜の花に心を梅の花に比喻している。

[資料29]

つう あ みりば マーン
さくらぬ はなだきよ
きいむゆ みりば
むみぬ はなゆ マーンヨ ヨーイ
ばん たらすい マーン
ぶなりゃ たらさ
びきりゃがまゆ マーンヨ

(『上野村の歌謡』5)

[訳] あなたを見ると桜の花のよう、心を見ると梅の花である。私を惚れさせる、乙女を惚れさせる、殿方であるよ。

4 会うたびにあなたへの愛が増す

「見るたびにさらに見たくなる、会うたびに思いが増すよ、私は」という形の告白は求愛を示している。とくに「ばやよ (私はね)」という言葉は、相手が眼前にいることを示唆している。

[資料30]

うりみりばまい
ゆぬ みぶしゃよ
いちゃいみりばまい
ゆぬ かなしゃゆ マーンヨー ヨーイ
みゆいが なか マーン
いでやゆが なかどう
まさりや うむゆ ばやよ

(『上野村の歌謡』6)

[訳] 見てもまた見たいものです、出会って眺めても同じように愛しいものです。見るにつれて、出会うにつれて、愛しさが増してきます、私は。

5 あなたを忘れられない

「思い出すまい、忘れてしまおうと思っても、あなたのことは忘れられない」という未練を断ち切れない心を相手に告白することで求愛する歌がある。関係の成立をうかがわせる要素がないので、関係の未成立の段階と解釈される。したがって、破綻を前にした歌ではない。

[資料31]

サーヨーイー	サーヨーイー
うまーじゃーんちー まーん	思い出すまいと
うむいばまいよー	思っても
ばすりどう すーじーちー	忘れてしまおうと
うむいばまいよー	思っても
ウウあが くとうや まーん	あなたのことは
ぶなりゃが くとうや	乙女のこと
ぼっしらいんによー	忘れられないよ

(『城辺町史』116)

[訳] 思わないようにと思っても、忘れようと思っても、あなたのことは、ああ、乙女のこと忘れられないよ。

6 岩もあなたの船に見える

愛の深さを「東平安名崎の岩を眺めても、あなたの船ではないか、と驚いてしまう」という形で表現することがある。何事も愛する人と関連づけてしまう心の傾きを告白することで求愛するのである。

[資料32]

東の 平安名の 岩石 (ゆいし) うまいよ
動 (もゆ) けや 居らん 岩石がまうまいよ

貴男（つぶあ）が 船てど
可愛者（かなしや）が 船だらてど 驚きうたいよ
（『西原民謡集』17）

〔訳〕 東の平安名崎の岩石も、動くことのない岩石も、あなたの船だと、愛しい人の船だと、驚いてしまったよ。

7 受け入れてほしい

「あなたに会いたい一心で、嶺を越えて通ってきたのだから」と通う苦勞を理由にして、受け入れてほしいと要求する、求愛の形もある。

[資料33]

ウウ あ みーでいが マーン	あなたに逢いたい
ゆていがまんど う ばやーよー	一心で私は
ぶなりや みーでいが	恋人に逢いたい
ゆていがまんど うよーおーいー	一心で
ムみぐいがみまい	嶺を越えて
ぶなりや んかいていどう	恋人を妻に迎えようと
かゆいや しゅいよーおーいー	通っているのだ
ムばていや あいあだ	いやだと言わないで
かいしや ふうーだな	追い返しはしないで
うきやいや ふいるよー	受け入れてくれ
かなしやよー	カナシャよ

（『城辺町史』80）

〔訳〕 あなたに会いたい一心で私は、乙女に会いたい一心で、嶺を越えて、乙女を迎えようと通っているのだ。いやだとは言わないで、追い返しはしないで、受け入れてくれ、愛しい人よ。

受け入れてほしい心を「仕事が手に付かないほど」惚れていると強調する形で求愛する事例がある。

[資料34]

汝んな惚れど イラ可愛者 (かなしゃ) ゆ
爲 (あ) そです仕事の 成らだたむゆ
汝まいどや 思ひや見る 我 (ばん) が可愛者よ
(『宮古史伝』6)

[訳] あなたに惚れて、ああ、愛しい人よ、成すべき仕事ができないでいる。
あなたも思ってください、わが愛しい人よ。

8 あなたを愛する心は不変

歩き慣れた道、通い慣れた道を歩きながらも、私の心に変わりはない、という形も求愛の歌である。「一度や二度の訪問で女は手に入るものではない、屋敷が凹むまで通っていらっしやい」という歌がある。この歌の歩き慣れた、通い慣れた道は、それに対応するのであろう。何度同じ道を通っても愛する心に変化はない、という形での求愛であろう。なお、この歌は、相愛の歌で、愛の不変の歌とも解釈できそうであるが、「歩き慣れた道、通い慣れた道」という表現を、来し方をふりかえるものとするのは無理がある。相愛の二人が回想するのであれば、たんに「歩いた」道でよいであろう。

[資料35]

歩 (あい) つ慣 (な) らい 道がまかーらよー
通 (かよ) いならい 道がまかーらよー
何時 歩かばまい 肝ぬ 変いてーや
なう 有らでがーよー
(『西原民謡集』41)

[訳] 歩き慣れた道から、通い慣れた道から、何時歩いても、心の変わるかがどうしてあるだろうか。

9 あなたと相性が合う

「あなたとなら肥沃な土地の豆がよくできるように、繁栄するであろう」と農業生産者らしい比喻を用いて求愛する事例がある。

[資料36]

汝（うゝ あ）とやてがゆ 君とならば、
いらゆかなしゃがま 愛しい人よ
肥料（ふふあい）むつ 肥沃な
底地（すくず）ぬ 底地の
豆の花だき 豆の花のように
ゆうできはずそが よく繁茂もしようが（繁昌する）
他人（ゆくそ）とやてがあ 他人となら、
なうや生（うい）ん 何も生えない（作れない）
がんな畑（ばたき）しゃく 赤かに地のガンナ畑の豆の花のように
（できがわるいだろう）

（『伊良部村史』49）

[訳] あなたとならば、ああ愛しい人よ、肥沃な底地の豆の花のように、よく出来るはずだが、他人とならば、何も生えないガンナ畑のように、赤土のガンナ畑の豆の花のように出来が悪いだろう。

10あなたを抱きたい

夜這いの辛さを訴えた求愛の歌もある。

[資料37]

サーヨーイ
夜這（よばい） すや まーん 非常（あて） 苦（く） かいーばよ
夜中廻（ま） ーいやー どつ 苦（く） かりやーよ
ー（ひと）夜んなー まーん 二夜んな
抱（だ） かいや 下（ふい） るーよー

（『西原民謡集』35）

[訳] 夜這いするのはとても苦しいので、夜中廻りはあまりにも苦しいので、一夜のうちに、二夜のうちに抱かれてくれないか。

11結ばれる運命

占いを持ち出して相手の女性と結ばれる運命にあることを強調することがある。何度占っても、私にふさわしい相手はあなたしかいないという結果が出るかと求愛する男。ここでは、感動詞「まんよー」「まーんてい」「まーん」が多用されていて、結ばれるべき運命の強固さと自分の感情の切実さを強調している。「まーん」は「真に」の意。

[資料38]

うゆびぬじゃーん ぶりば まんよー	指さえも折っても ねえ
いちぢがさんノど	五つ指を
ぶりんどうまいよー まーんてい	折って数えても 本当にねえ
つづあとうどう まーん	あなたとこそ ねえ
ぶなりやとうていどう	女とこそ
ぶらいや うーいよー	指折り〈運命〉は(定められて)いる

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ35」)

[訳] 指を折っても、五つの指を何度折っても、私はあなたとこそ、乙女とこそ運命を定められているよ。

12願掛け

相手の女性の門前に供物を供えて靡かせようとする歌がある。愛する女の門前に供物を供えて、愛の成就を訴えるのである。相手の心をえるために「恋の願掛け」をする。なお、[資料40]は「とりすて」を「とり捨て」と訳しているが、「取り+して(サ変)」の合成動詞で「取ってから」と解釈するのが正しい。

[資料39]

うわがざおんな	おなたの門に
いらよがぶなりやがまよ	愛しい乙女よ
んなむずばなゆに	麦、粟のパナを供え
おかおのみすずしい	線香三本で
たてばんむちゅうとい	願立てをしておき
うわがとらいば	あなたとつれ添ったとき(あなたが妻になったときに)

うわやそいそい あなたと連れ立って

ばんのば一ぼとかでよ 解願を祝おうよ

(『伊良部村史』21)

[訳] あなたの門前に、ああ乙女よ、麦と粟を供え、線香三本で願立てをしておき、あなたが手に入ったら、あなたと連れ添って願を解きたいよ。

[資料40]

うわ'たが 門(ぞう)よ いきまい お前らの門に行って

見(み) いる 見ろ

小麦(んなむぎ) 小麦と

花米(ばなよね) 花米と

御香(おかう)の 三本 お線香の三本が

おやしらりをむ やうい 上げられておる

うわ'ば とりすて お前をばとり捨て

かなしやば とりすて 可愛者をとり捨て

ぼとけ おやしで お願ほとき(願解き)をしてやろう

やういゝゝ ヨーイヨーイ(ハヤシ)

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね55)

[訳] あなた達の門前に行って、見てごらん。小麦や花米や御香三本が供えられているよ。あなたを手に入れてから、愛しい人を手に入れてから、願を解きたいよ。

13長期に渡る愛

恋の始まりを、産毛の頃、目眉の付きはじめた頃からだと、長期に渡る愛を強調して求愛する歌がある。後の[資料42]の事例は「親の籠めた夜から」だと、より早い時期であることが強調される。

[資料41]

あかばにからジャ

うぶ毛の幼い頃を

うむいや みーる一よー

考えてご覧なさい

みまゆー ちち ばなんからどうよー	目眉がつき始める幼い頃から
まーん	本当に
つヴあとうていどう まーん	あなたとこそ 本当に
ぶなりやとうていどう	女とこそ 本当に
みくみ やたーいよー	見込んであった
あがいたんでい しまりゃい	ああ本当に 心を染めた女よ
つヴあとうどう ないていどう	あなたとこそ (一緒に) なるんだ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ36」)

[訳] 若い産毛の頃を思い出してごらんよ。目眉が付きはじめた頃から、あなたとこそ、乙女とこそと見込んできたよ。ああ、愛しい人よ。あなたとこそいっしょになるのだ。

[資料42]

親ぬ 込みたい 其ぬ 夜んかーらよー
 見ーまゆ づつ ばなんかーらよー
 君 (うば) とてーど
 可愛者 (かなしや) とてーど
 えんな つきや ういーよー
 (『西原民謡集』30)

[訳] 親の籠めたその夜から、目眉が付きはじめた頃から、あなたとこそ、愛しい人とこそ縁は付いたのだ。

14難題もこなす

相手の愛をえることの困難さに比べれば、他の何事も容易であるという気持ちをあらわすために、「あなたが手に入るなら一里の浜の白砂でも数えてみせ」と告白することがある。どんな難題も気にしないことを強調している。数えるものは砂や砂利など。

[資料43]

つヴあがじゃーんどう あなたさえ

とうらいでい やていがー	取れたならば
ぶなりゃがじゃーんどう	女さえ
だかいでい やていがー	抱けたならば
いちりはまぬ	一里ある浜の
しるんなぐーまい	白砂でも
(はまさだりゆまい)	

ゆみみし しゃくよー 数えてみせたいほどだ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ13」)

[訳] あなたさえ手に入れられるなら、乙女さえ抱けるなら、一里もある浜の白砂でも数えてみせたいほどだよ。

[資料44]

ウウゝ あがじゃーんどう	あなたさえ
とうらいでい やていがー	私のものになったら
うむゆすうあにがまが	私の愛する恋人が
だがい でい やていがー	抱けるものなら
かなしゃがまよ	
さらはまぶーぬ はまさざりゆーまい	佐良浜の入江の浜のさざれも残らず
ゆみひつ なす しゃく	数えてみせたいくらいだ
かなしゃがまよ	いとしい人よ
(『五線譜のあやぐ』27)	

[訳] あなたさえ手に入るならば、愛する姉さんが抱けるなら、愛しい人よ、佐良浜の入江の浜砂利さえも数えてみせるほどだ、愛しい人よ。

[資料45]

汝がじゃーんど とらゆでやてがよ	君と結婚できるなら(君さえとれるなら)
かなしゃがじゃーんど だかゆでやてがよ	愛しい君がさえ、抱けるものならば
いらかなしゃがま	愛しい者よ
千里がばまぬ、はまさだりゆうがみ	千里の浜の、浜砂利さえも

ゆみみし、しゃくど

数え上げてごらんに入れる程だ

かなしやがまよ

愛しい人よ

(『伊良部村史』48)

[訳] あなたさえ手に入るならば、愛しい人が抱けるなら、ああ愛しい人よ、千里の浜の浜砂利さえも数えてみせるほどだ、愛しい人よ。

[資料46]

男サーヨーイ

貴女(つぶあ)がぢやんど とらいてがーらーよー

恋慕(おもう)よる 彼女(ぼなりや)がじやんどー

抱かゆてがーらーよー

千里が 浜のよー 浜さだりうまーい

読み見し 程(しや)くーよー

(『西原民謡集』37)

[訳] あなたさえ手に入るならば、愛する乙女が抱けるなら、千里の浜の浜砂利さえ数えてみせるほどだ。

難題の一つとして千里の道を通うという形がある。愛をえるためには千里の道も一里ほどの短さに思える。

[資料47]

汝がじゃーんな、とらゆでやてがよ 君が僕の妻になってくれるのでしたら

千里の道まい、一里だきてど 千里の道も、一里のように

通いくうでよ、かなしやがまよ 通ってくるよ、愛しい人よ

(『伊良部村史』53)

[訳] あなたさえ手に入れることができたなら、千里の道も一里ほどだと思って通ってくるよ、愛しい人よ。

15強奪

直接的な告白の最たるものとして「相談しても聞き入れない女に強引な手段に訴えても手に入れてみせる」と迫るばあいがある。

[資料48]

相談 (さうだん) そをば きすかだか	相談することをば聞かなければ
和談 すをば おきだか	和談することをば受けなれば
むつん いみやば	道にみる時には
やらうとりん といみしで	無理矢理に取ってみせるぞ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね96)

[訳] 相談することを聞き入れなければ、話し合うことを受け入れなければ、もし道で見かけたら、無理やりにでも奪い取ってみせるぞ。

16男の特性＝干瀬の波

相手を説得する論理として、男性一般の心理的特性を持ち出すことがある。干瀬に打ちつける波が浜まで寄せてきて静まるように、男は愛する女を抱くことで心が静まるものだ、と自然と人事を対比し、そこに共通の法則があるという論理を用いている。直接的に受け入れるようにとのほたらきかける言葉はないが、男心の法則を述べておいてから、「かなしゃがまよ (愛しい人よ)」と呼び掛けているところに「男心を察して受け入れてほしい」という求愛の心がこめられている。

[資料49]

ひしんな ぶりゆズ なんがまどうんまよ	干瀬に寄せる波でさえ
はまや うちやだな しなすさ うちやだな	浜に寄せず 砂洲を打たずに
やむいんなむぬ	終わることはない。
ばんぬ くぬ にしゃやどうんま	われ男と生まれて
うむゆす あにがまう	愛する人を
とうらだな なまらん	ものにせずにはおかない
かなしゃがまよ	いとしい人よ

(『五線譜のあやぐ』26)

[訳] 干瀬で折れ砕ける波でさえ浜辺を打たずに、砂洲を打たずに止まないものである。私、この若者も愛する姉さんを手に入れられないでは気が静まらないよ、愛しい人よ。

茶碗の酒は手に取った人のもの、美しい女性は抱いた人のもの、という二つの事項は、積極的な人こそ何事も成功するの意であろう。この論理を元にして、「あなたも私の積極性を察して愛してほしい」と求愛する。

[資料50]

茶碗の 酒や	茶碗の酒は
もちゆすが ものよ	持つ人のものよ
あばらぎ みどんま	美しい女は
だきよすが ものよ	抱く人のものよ
うわまい どやよ	お前もよ (わたしを)
おもへや みり	思ってみろ
きもん そまりやよ	心に染まる人よ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね60)

[訳] 茶碗の酒は先に持った人のものである。美しい女は先に抱いた人のものである。あなたも私のことをそのように思ってみなさい、心に染まった人よ。

17あなたの子供がほしい

女性が男性に対して「あなたの種を抱きたい」という形で求愛する歌がある。女性から求愛する歌は、トーガニでは別に特殊な事例ではないが、この歌のような積極性と露骨な表現は例を見ない。あるいは笑いの歌であろうか。笑いの歌には、下ネタが多い。

[資料51]

はいよがはいよ	ハイハイ
にしゃいおやよ	若者よ
はいよがはい	ハイハイ
おきみぞりにしゃいがま	オキミゾリ若者よ
うわがさによど	あなたの胤を
おきみぞり、にしゃいがさによど	おきみぞり若者の種を
だきみいぶすかり	抱いて見たいものよ

(『伊良部村史』30)

[訳] もしもし若者よ、もしもし目の覚めるような若者よ、あなたの種を、目の覚めるような若者の種を、抱いてみたいものです。

第四節 失恋

恋愛関係が未成立の段階にあるときの、心を表現する第四のタイプは、失恋である。失恋は、相手の心を獲得できなかった状態である。

失恋の歌は①拒否、②諦め、③後悔、④恨み、⑤失意、⑥途方に暮れる、⑦再起の意欲、などという心を表現する。

1 拒否

拒否を表現する歌には、もっと足繁く通えというものと、時すでに遅しというものがある。

(1) 足しげく通え

一夜や二夜通ってきた程度で女は抱かれるものではない、もっともっと足繁く通って、庭が凹むほど通って、誠意を示しなさい、返事はその後です、という心を表現する。

[資料52]

ひとうゆん　とうらいい	一夜にとられる（抱かれる）
みどうんまにゃーにばヨー	女はいないので
ふたゆん　だかいい	二夜に抱かれる
ぶなりゃやにゃーんヨー	女はいない
みなかぬ　ふぐんきゃ	庭〔の立ち処〕がへこむまで
とうくぬぬ　ふぐんきゃ	床根（敷地）がへこむまで
かゆいんみゃていヨー	通っていらっしやい

（『日本民謡大観』6）

[訳] 一夜で取られる女はいない、二夜で抱かれる女はいない。庭がへこむまで、敷地がへこむまで通っていらっしやい。

[資料53]

ひとつゆん　　とうらゆば	一夜にとられたならば
いら　にしゃやヨ	ねえ二才（青年）よ
ひとつゆが　じゅり　うぐまばやらヨ	一夜の女郎と言われるでしょう
みなかぬ　ふぐんきや	庭〔の立ち処〕がへこむまで
とうくぬぬ　ふぐんきや	床根（敷地）がへこむまで
かゆいんみゃていヨー	通っていらっしやい
（『日本民謡大観』 7）	

[訳] 一夜で取られたら、ねえ若者よ、一夜の女郎と呼ばれるでしょう。庭がへこむまで、敷地がへこむまで通っていらっしやい。

[資料54]

あにがまやーや　うむいやみーるヨー	お姉さんの家を思ってみなさい
いちいなかどう　いんな　ちいふヨー	行く仲にこそ縁はつくよ
かゆいなかどうよ　うむいやみーる	通う仲にこそ思いはみるよ
あだやすんヨー	無駄にはならない
（『日本民謡大観』 5）	

[訳] お姉さんの家のことを思ってみなさい、行くほどに縁は付く、通うほどに、思ってみなさい、無駄にはならないよ。

(2)時遅し

もう少し早めに求愛してくれたら受け入れたものを、今となっては遅かった、という形で求愛を拒否する歌がある。拒否する理由がはっきりと述べられているわけではないが、恋人なり夫なりがいるということであろうか。

[資料55]

サーヨーイー	サーヨーイー
さうだん　すゆばな	相談してきたら
ムば　やたいなよー	嫌ではなかったのに
わだんゆ　すゆばな	和談してきたら

ゆむや やたいばなよーいー	拒みはしなかったのに
んなま なりー まーん	今になって
とうりゆ だかり むぬやらんによー	めとって抱けるものではないよ
あし なうが まーん	だって何が
ゆむゆ いきゃが	だっていかなることが
しらり むぬがよー	できるものか

（『城辺町史』117）

[訳] 相談した時にはいやではなかったのに、和談した時には嫌いではなかったのに、今になって取って抱けるものではないよ、だって何が、だって如何なることができるだろうか。

次の事例は前の歌の続編である。求愛を断った女性が、他の女性との結婚を勧めるというものである。

[資料56]

サーヨーイー	サーヨーイー
あばらぎ みどうムとう	美しい女性と
キむ ゆし ぶらくとう	心を寄せた保良娘と
いらゆ びきりゃよーいー	ねえ 男よ
あたイゆ なうりー	あたり直して
ゆかイ なうりー	幸せになれ
いらゆ びきりゃよー	ねえ 男よ

（『城辺町史』118）

[訳] 美しい女性と、心を寄せた保良の娘と、ねえ若者よ、あらたに探し出して、幸せになりなさい、ねえ若者よ。

2 諦め

なんらかの理由で相手の愛を獲得できずに「諦め」の感情を表現するものがある。その理由として①相手があまにも輝く人であること、②自分が世間の人から「女郎よばわり」をされているものであることをあげる。両者とも相手と自分の関係がふつりあいなので、身を引いてしまう。

(1)北極星

相手の女性があまりにも美しく輝く存在であるために、ただひたすら見上げるだけで、思いを断念するものがある。自分とはつりあわない高嶺の花として相手を眺めて暮らすだけであるが、それを「北極星」に対比したり、鷹を捕獲するために高い木に仕掛けた「罟」に対比したりする。ともに高く見上げるものである。「いつも美しく輝いていて手の届かない女性を、ただ見上げていることしかできない」と諦める。

[資料57]

なツふうゆ	かわらん	夏も冬も位置の変わらない
にぬばぬ	ぷすがまよー	子の方角にある小星よ
くむらだ	ていりー ういー	曇らず照っている
にぬばぬ	ぷすがまよーいー	子の方角にある小星よ
ウう ^ゝ	あや みやぎどう	あなたを見上げて
かなしゃや	みやぎどう	カナシャを見上げて
くらさでい	やーりゃーよー	暮らすつもりだよ

(『城辺町史』56)

[訳] 夏冬変わらない北極星よ、曇らずに照り輝いている北極星よ、それを見上げるように、あなたを見上げるだけで、愛しい人を見上げるだけで暮らしていくつもりだ。

[資料58]

夏冬(なつふうゆ) 変(かは) らぬ
子(ね) ノ方(は) の星(ぶす) がまよ
雲(ふむ) らだ照(て) り居(を) る
子ノ方の星がまよ
汝(うわ) や見(み) 上げど
星がまや眺(なが) めど
暮(くら) さでひゃんよ

(『註釋曲譜附 宮古民謡集』8)

[意識] 夏冬変らぬ北極星よ、曇りなく輝ける北極星よ、お前を眺め暮らすだけで、我れは味気なく終るのであらうか！恋ひ慕へる美しい女性がある。彼女は常に我が視界にちらついて、北極星のそのの如く輝やかなしい底深い瞳を以て我を見てゐる、でも！でも！彼女と我とはたゞ見合ふだけで、とても寄り添ふことは出来難い環境の内にある。あゝ遂に我はこのまゝ終るべきであるか…そこに深い太息が聞こえるよううたである。

[訳] 夏冬変わらない北極星よ、曇らずに照り輝いている北極星よ、それを見上げるように、あなたを見上げるだけで、星を眺めるだけで暮らしていくのだろうか。

[資料59]

サーヨー

夏冬変らぬ

子(に)ぬ方(ふあ)ぬ星(ふし)がま

曇(くむ)らだ照り居(う)い

子ぬ方ぬ星がま

汝(げあ)や見上けど

かなしやや見上げど

暮(く)さでびやあむ

(『伊良部村史』34)

夏冬変らない

北極星よ

曇らず輝く

北極星よ

御身を眺め

愛しい君を眺めて

日を過ごしたいものよ

[訳] 夏冬変わらない北極星よ、曇らずに照り輝いている北極星よ、それを見上げるように、あなたを見上げるだけで、愛しい人を見上げるだけで暮らしていこう。

[資料60]

なちふゆ かわらん

にぬばぬ ぶしがま

くむらだ ていりうい

にぬばぶすがま

夏冬変わらぬ

子の方角の星

曇らずに照りおる

子の方角の星(を見るように)

うヴぁ みあぎどう おまえを見上げてぞ
かなしゃ みあぎどう 可愛い者を見上げてぞ
くらしょーい 暮らすことだ

（『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ94」）

[訳] 夏も冬も変わらない子の方の星（北極星）よ、曇らずに照り輝く子の方星よ。それを見上げるように、あなたを見上げるだけで、愛しい人を見上げるだけで暮らしているよ。

[資料61]

なついふゆ かわらん 夏も冬も変わらない
にぬばぬ ぶすいがま ユー 子の方の星（北極星）よ。
ふむらだ ていりうり 曇らずに照っている、
にぬばぶすがま ヨー 子の方の星（北極星）よ。
っヴぁや みゃーぎどう あなたを見上げて、
ぶすいがまや ながみどう 星を眺めて、
くらすでい びゃーム ヨー 暮らしたいものだ。

（『宮古のフォークロア』「即興歌トーガニ」5）

[訳] 夏も冬も変わらない子の方の星（北極星）よ、曇らずに照り輝く子の方星よ。それを見上げるように、あなたを見上げるだけで、星を眺めるだけで暮らしていこう。

[資料62]

夏冬変らぬ子（に）の方（ば）の星がまヨ 夏冬変らぬ北極星よ
曇らだ照り居る子の方の星がまヨ 曇らず光る北極星よ
汝（ヴわ）や見上げどかなしや見上げど お前を眺め恋人を眺め（るだけで）
暮さでびあむヨ 過ごさねばならぬのかしら？

（『宮古民謡選集』1）

[訳] 夏冬変わらない北極星よ、曇らずに照り輝いている北極星よ、それを見上げるように、あなたを見上げるだけで、愛しい人を見上げるだけで暮らして

いくのだろうか。

[資料63]

なつふゆ かわらぬ	夏冬かわらぬ
にぬばぬ ぷしがまゆ	子の方角の星を
くむらだ ていりゆる	曇らず照りおる
にぬばぬ ぷしがまゆ	子の方角の星を
つヴぁや みゃーぎどう	あなたを見上げてぞ
ぶしがまや みゃーぎどう	星を見上げてぞ
くらしうイ	暮らしている

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ57」)

[訳] 夏も冬も変わらない子の方の星(北極星)よ、曇らずに照り輝く子の方の星よ。それを見上げるように、あなたを見上げるだけで、星を見上げるだけで暮らしているよ。

(2)鷹の畏

北極星と同様に高木の畏も見上げるものとして、恋人を見上げる心の比喻として用いられる。

[資料64]

たかついぎ ゆぶがまう	鷹の畏を
みやぎりにゃーん ヨー	見上げるように、
ゆくたいぎーがまう	横たえた木を
みやぎりにゃーん ヨー	見上げるように、
うヴぁ みやぎ	あなたを見上げて、
ぶなりヤイ みやぎ	乙女を見上げて、
みやぎどう しゅーらでい ヨーイ	見上げていよう。

(『宮古のフォークロア』「即興歌トーガニ」28)

[訳] 木に仕掛けた鷹の畏を見上げるように、横たえた木を見上げるように、あなたを見上げて、乙女を見上げて、ただ見上げていよう。

(3) 女郎の評判

世間の人から女郎呼ばわりをされていることを苦にして相手のことを誹める歌がある。

[資料65]

んちノ　じょり　あいざいからよー	道の女郎と言われてからは
ヨまたノ　じょり　ゆまいからや	四叉の女郎と言われてからは
んなまからや	今からは
コノイからや	これからは
はなや　さかいんよー	花は咲けない
あがいたんでい	ああ本当に
っヴあとうや　ならんさ	あなたと（一緒に）なれない

（『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ41」）

[訳] 道の女郎と言われたからには、四辻の女郎と呼ばれたからには、私はこれから花を咲かせない。ああ、あなたとはいっしょになれないよ。

3 後悔

(1) 告白できなかったために他人の嫁にした

「告白できなかったために愛する女性を他人の嫁にしてしまった」形の失恋があり、それを後悔する歌がある。

[資料66]

むぬイぬ　ひとつくとう	物言いの一言
あるかにどう　ういどうよー	言いかねていると
くトばぬ　ひとつくい	言葉の一声
ゆんかに　うとういどうよー	読み（言い）かねていると
うむゆシ　ぶなりゃー	思っている女は
ひとつが　ていーんな	人の手に
いかひや　にゃーんよー	いかして（もう）ない

（『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ37」）

[訳] 物言いの一言を言いかねて、言葉の一声を言いかねていたために、愛す

る女を他人の手に渡してしまったよ。

[資料67]

サーヨ―イー	サーヨ―イー
むぬイぬ ピとうくい	ことばの一声
いらよ かなしやよー	ねえ 可愛い女よ
くとうばぬ ピとうくい	ことばの一声
ばなすかにどうよ―いー	かけかねて
ピとうじん なしー まーん	人手に渡して
ゆすじん とうらしー	他の手に渡して
にゃーんさいがよー	しまったよ

(『城辺町史』115)

[訳] 物言いの一声、ああ愛しい人よ、言葉の一声を話しかねたために、他人の手に渡して、よその手に取らせてしまったよ。

4 恨み

自分が思いを寄せる女性の愛を得られなくて、相手に恨みごとを言い渡す歌がある。「俺が死んだらお前の家の門前は茨の山になるだろう」というもので、自分以外に通う人はいないからサラカチ（茨）が山をなし、門前が荒れ果てた状態になるというものである。

[資料68]

おもゆる ぶなりやの	思う女が
とられだからよ	とれないから
おもゆる かなしやが	思う可愛者が
だかれだからよ	思う可愛者が抱かれないから
すねときやがまんな	(わたしが)死ぬ時には
うばたが ざうや	お前達の門は
さるかやまよ	サラカチ（茨）の山（のようにしてやるよ）

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね77)

[訳] 思いを寄せる女が手に入れられないので、思いを寄せる女が抱けないので、私が死んだ後は、あなた達の門前は茨のように荒れ果てるぞ。

[資料69]

うむゆる ぶなりやぬ	思っている娘を
とうらりだから	取れなかったので、
うむゆる かなしゃが	思っている愛しい娘を
だかりだから ュ	抱けなかったので、
すいにときゃがまん	俺が死んだら
っヴあがが ざうや	お前の門前は
さるかやま ュ	雑草の山になるだろうよ。

(『宮古のフォークロア』「即興歌トーガニ」18)

[訳] 思いを寄せる女が手に入れられないので、思いを寄せる女が抱けないので、私が死んだ後は、あなた達の門前は茨のように荒れ果てるぞ。

5 失意

「どんなに遠い所でも待ち受けて、いっしょになろうと焦がれている」という歌は思慕の歌になるが、その末尾句が「(いっしょになろうと) 思ったのだが」と過去形になると、いっしょになることがかなわなかった、失恋の歌になる。

[資料70]

青天 (あてん) がまの
下 (すた) がみまいよ
白雲 (しらくも) がまの
下がみまいよ
待 (ま) ちやきど 行 (い) か マーン
一 (び) と身 (み) ど ならてど
思 (おも) たるそがよ

(『註釋曲譜附 宮古民謡集』7)

[意訳] 青空のいや極（はて）までも、白雲の遠方（をちかた）までも、（どこまでも）お前を待ちまうけてぞ、つれ添はうと思ひしに。あゝ！

彼女は我を去（さ）つてしまった。捕へようとするれば恋は逃げてしまった。これからどうなろうと一寸先あ闇だ！言外余情に富んだアヤゴである。

[訳] 青空の下までも、白雲の下までも、待ち受けて行こう、いっしょになろうと、思っていたのだが。

6 途方に暮れる

なんらかの理由で「愛する女を失って途方に暮れている」感情を表現する歌がある。次の事例のばあい「つづあがあらだな（あなたがいけないので）」というだけでは、相手の不在の理由や生死もわからない。また「飛び鳥のようだ・舞い鳥のようだ」という比喩の意味がわかりにくい、飛んでいく目的地がない、「途方に暮れている」状態であろうか。

[資料71]

あみんむがまぬ	シたがままい	雨雲の下までも
しるんむがまぬ	シたがままい	白雲の下までも
つづあとうていど		あなたと一緒だと
うむゆたシが		思っていたが
つづあが	あらだな	あなたはいない
とつびどおりやぬ	しゃく	飛び鳥のように
まいどおりやぬ	しゃく	舞う鳥のように（行ってしまった）

（『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ34」）

[訳] 雨雲の下までも、白雲の下までも、どこまでもあなたといっしょだと思っていたが、あなたがいなくなってしまったので、（私は？）飛ぶ鳥のようである、舞う鳥のようである。

7 再起の意欲

愛する男のせいで、世間の人から「道端の女郎」と悪い評判をえているが、もう一花咲かせようと再起への意欲をみせる女性の感情を表現した歌がある。

失恋の経験に負けず、もう一花咲かせたいという心である。

[資料72]

つづあんな みーどう まーん	あなたに会って 本当に
まつふあや さまい	枕にされて
うが やらびや あいきゃー	こんなに童である時から
んちぬ じゅりよー んちぬ じゅり	道の女郎だ道の女郎と
ゆまいや ういよー	読まれ(言われ)てはいるが
みチノー ジョーり あいうらまいよー	道の女郎と言われているも
ゆまたノー ジョーり ゆまらばまーいよー	四又の女郎と言われているも
なまからどう まーん	今からぞ 本当に
コノイからどう まーん	これからぞ 本当に
はなや さきはいよー	花は咲くのだ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ40」)

[訳] あなたに会って枕にされて、幼いながら道の女郎と呼ばれている。道の女郎と呼ばれていても、四辻の女郎と呼ばれていても、私はこれから花を咲かせるのだ。

第五節 受諾

恋愛関係が未成立の段階にあるときの、心を表現する第五のタイプは、受諾である。受諾は、相手の告白を受け入れる心である。

(1)あなたの思いを受け入れる

受諾の歌は①あなたの思いを受け入れるという心を表現した歌が一首あるのみである。

求愛する相手の涙を見て、その誠意を受け入れようという歌である。涙、受け入れるという単語のほかは、感動詞の多用であり、感極まったようすが窺える。

[資料73]

あがい たんदै すまりゃい やれ スマリャよ

すまりやが みぬ 　　なだ スマリヤの涙を
あがい たんでい すまりやい やれスマリヤよ
うがみどう うきやーでい ありがたく受けよう

（『城辺町史』83）

「やれ、スマリヤ（恋人）よ。あなたの涙を、私はありがたく受けとることにしよう。恋人の申し入れを受け入れる女性の歌。」

〔訳〕 ああ愛しい人よ、愛しい人の目の涙を、ああ愛しい人よ、それを拝見したのであなたの思いを受け入れましょう。

第二章 関係の成立

抒情主体と相手との間に恋愛関係が成立している状況のときに、抒情主体の心に生じる感情のありかたは、互いの愛を確認する肯定的な感情を表現したものが案外多い。和歌の恋歌と比較して、このように肯定的な感情を表現した歌が多いのは、琉球の抒情歌謡の一般的な特徴であるといえるだろう。だが、二人の間に相愛関係があるにしても、あるいはあるからこそ、否定的な感情を表現することもある。相手にたいしてより深い愛を求めて不満を訴えたり、相手の愛を疑ったりする。また、「一時的な離別」の状況において、逢瀬の後にやがて別れの時がくるが、その別れ路の悲しみや辛さを表現する。さらに、同じく「一時的な離別」の状況の時に、相手を恋しく思う気持ち、会えずに戻るときの気持ち、あるいは待ち合わせている相手があらわれるのを待つときの気持ちなどを否定的に表現することもある。たとえ、二人が相愛の関係にあるにしても、恋の感情は複雑・多様であり、恋歌にはその多面的な恋のありさまが表現されている。

関係の成立の歌は、第一節相愛、第二節一時的な離別、第三節愛の葛藤に分類し、これらをさらに区分してみた。

第一節 相愛

相愛の歌は、(1)愛の始まり、(2)愛の告知、(3)愛の確認、(4)讚美、(5)秘密、(6)

愛の不変、などの心を表現するが、これらはさらに微細な局面に分かれる。

1 愛の始まり

愛の始まりの歌は①出会い、②急速な愛の深まり、③愛の力、などの心を表現する。

(1) 出会い

出会えた縁を大切に思い、それを二人の愛の始まりとして相手にも確認を求めている。なお、「あぐ」には友人のほかに恋人の意もある。

[資料74]

みよだから うわ`をば	見なければあなたを
いざの びとから すさだたむ	何処の人か知らなかったのに
みよたりやアの	見たからの
いでをたりやアの	出会ったからの
かなす あご やうい	恋しい人であるよ

（『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね95）

[訳] 見なければ、あなたをどこの人か知らなかった。見たので、出逢ったので、愛しい人になってしまったよ。

[資料75]

いじゃや みーぶス	出逢ってみたい
かぬしゃどう やりゃーよー	カナシャであるから
ばなしや みーぶス	話を交わしてみたい
ぶなりやどう やりゃーよーいー	乙女であるから
いじゃいからや まーん	出逢ってからには
とうりゃいゆからや	相談を済ませてからには
いら かなしゃよー	ねえ カナシャよ

（『城辺町史』76）

[訳] 出逢ってみたい愛しい人であったから、話してみたい乙女であったから、

出会ってからは、ああ、取ってからは、ああ愛しい人よ。

[資料76]

みゆんゆきやや マーン
あていぬな一ずいなよ
いでやゆんきややよ
ゆぎぬな一ずいぬがよ ヨーイ
みゆたりやぬ ハイ ドウキ
いでやゆたりやぬ
かなすい あぐゆ マーンヨ

(『上野村の歌謡』 2)

[訳] 見なかったならそれほど思わなかったのに、出会わなかったならこんなにも思わなかったのに、見たために、出会ったために、愛しくなってしまった、恋しい人よ。

[資料77]

見ゆんけや一 まーん 知らんそがどーよ
出合 (いぢや) まーんけや 知らんそがどーよ
見ゆたーりーばど 恋ゆたーりやーど
うが 可愛者一よ一

(『西原民謡集』 44)

[訳] 見なかったなら知ることもしなかったのに、出会わなかったなら知ることもしなかったのに、見たために、恋したために、こんなにも愛しいことよ。

(2)急速な愛の深まり

出会ってまもなく急速に深まっていく愛を確認したものが次の事例である。ほんの短い間に男を深く愛してしまった女。一夜の関係でたちまち縁が深まり、二夜目にはたがいの「赤血 (血液)」まで浸透しあって一つになったと誇張的に表現する。

[資料78]

ぴいとうゆ一んどう	一夜で
むむていぬ いんな	百年の縁を
つきいさむぬ ヨイ	尽くしたのである。
ふたゆからや	二夜からは
あかついがみ	赤い血まで
ぴいていつい なり ヨーイ	ひとつである。

（『宮古のフォークロア』「即興歌トーガニ」27）

[訳] 一夜の逢瀬で百年分の深い縁を染め尽くした。二夜からは赤い血まで一つになるよ。

(3)愛の力

相手の愛が確信できたときに起こってくる感情を「愛の力」として表現する歌がある。相手の女性を見初めて以来、力や勇気が心底湧いてくるのを感じているのである。

[資料79]

つげあー みーや	あなたを見染めてからは
かなしゃがま	愛しい女よ
いでいんが たやまい	出ない力も
いでいすい しゃくよー	出で加わるほどだ
すいんが いジまい	添えない勇気も
いでいすい しゃく	出で備わるほどだ
すまりゃがまよ	（心身を）染めた女よ

（『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ15」）

[訳] あなたを見初めてから、愛しい人よ、出ない力も出るようだ、添わない勇気も出るようだ、愛する人よ。

[資料80]

あさが一のみづだき	朝井戸の水のように
ばんがつむそらしゃがま	僕の心を和ます者よ

いdeg一のみづだき
いでみぞりかなすもの
うわやみいや
ばんどんま
いでんよたやがみ
そいんよいずがみ
いでどおりよ
そいどおりよ

泉の水のように
本当に愛しいものよ
君をみると
僕は
出せない力（体力、元気）まで
添わない意地まで
出ているのだよ
添っているのだよ

（『伊良部村史』28）

[訳] 早朝の井戸水のように私の心をさわやかにする人よ、泉の水のように目の覚めるほど愛しい人よ、あなたを見てから私は、出なかった力まで、添わなかった勇氣まで、出ているよ、添っているよ。

2 愛の告知

愛の告知の歌は①あなたに靡いている、②あなたを忘れることはない、③あなたから離れられない、④あなたといっしょなら怖いものはない、⑤あなたへの思いを織る、などという心を表現する。

(1)あなたに靡いている

次の事例は、山奥に生えている竹が風に吹かれて靡くようすと、男に柔らかく靡く女性を同類のものとして対比している。そうすることで、風に靡く山の竹と女性のイメージが重なってくる。山奥の竹は、ほかのなにものでもなく、風だけに靡いている、それと同じように、女の私はあなただけを頼りにして靡いている。

[資料81]

やまそこだけ いら かなしよ
かぜ よそいど なびけや をりよ
ばんの ぶなりやや

山底の竹はイラ可愛いものよ
風のままにまにナビいているよ
わたしの女は

びきりや たどり なびけや をりよ 男を頼りになびいているよ

（『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね76）

[訳] 山奥の竹も、ねえ愛しい人よ、風の吹くままに靡いているよ。女の私は男のあなたを頼りにして靡いているよ。

(2)あなたを忘れることはない

井戸水を汲む仕事は、かつて女性や子供の労働であったが、百段もある井戸の階段を登っていく辛い労働のときでさえ、相手の男性のことを忘れることができない心を表現している。井戸水を汲む重労働を極端な一例として示して、どんな極限状況の時でもあなたを忘れることはない、と愛を強調するのである。

[資料82]

来間川の百段（ももだん）を	来間川の数えきれない石段を
上（ぬ）る ^ゝ がつかまい	上る際にも
貴殿（う ^ゝ わ）がことのど	あなたのことは
かな者がことのど	愛人のことは
忘（ばす）りちや為（し）らりぬ	忘られないよ

（『宮古民謡選集』11）

[訳] 来間川の百段を上りながらも、あなたのことを、愛しい人のことを、忘れることはできないよ。

[資料83]

ヤイヤヨーイ 来間（くりま）よーい	ヤイヤヨーイ 来間のよーい
井戸（がー）ぬよーい	井戸はよーい
百百段（むむだん）ぬよ あしまんぬよ	百百段の 石段があるよ
登（ぬぶ）りがつかない	登りながらも
貴方（う ^ゝ わ）が事（くとウ）ゆば	あなたのことを
愛人（かぬしや）が事（くとウ）ゆば	いとしい人のことを
忘（ばす）りちやすんじよう	忘れてはいないよ

（『沖縄の民謡』4）

[訳] 来間川の百段を、ああ、上りながらも、あなたのことを、愛しい人のことを、忘れることはないよ。

[資料84]

うまれがあの	生まれ井（地名）の
もゝだんがまを	百の石段を
こえがつなまい	越えながら
うわが ことや	お前のこと
たヴきやが ことや	ただ一人のことが
ばすれらん やうい	忘れられない

（『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね93）

[訳] 産湯を汲む井戸の、百段もある坂道を登りながらも、あなたのことは、ただ一人のことは忘れることはできないよ。

次の事例の「ブラガ」は保良集落の東海岸の崖下にある湧泉名。たんに、その階段を降りる辛さを表現しているのかとも考えられるが『城辺町史』は「水を汲むために、桶を頭上にのせてブラガ（湧泉）の険しい階段を降りながらも、私はあなたのことを、片時も忘れたことはないよ。恋歌。」と説明している。そうだとすれば、呼びかける相手が女性であるので、抒情主体が男性であることがわかり、その点が他の類歌と異なる。

[資料85]

ぶらがぬ だんがまー	ブラガの階段を
うりーしゃーなまい	降りながらも
ばやーよー	私は
ななだん すくがまー	七段下にある崖底まで
うりしゃなまいよーおーいー	降りながらも
ウうゝあがゆ くとうー マーン	あなたのことを
ぶなりやが くとうゆ	恋人のことを
わすりちゃー にゃーんによー	忘れたことはないよ

（『城辺町史』82）

〔訳〕 保良川の階段を降りながらも私は、七段底を降りながらも、あなたのことを、乙女のことを、忘れることはないよ。

大海を航海することも困難な例の一つである。極端の例示を航海する事象に入れ替えると、類歌が成立する。このばあいは、航海が男の仕事であるから、抒情主体も男である。

〔資料86〕

うふとう いでい	大海に出て
ひゃるとういまいヨー	走って（船に乗って）いても
とうなかん いでい	渡中に出て
ひやりゅとういまいヨー	走って（船に乗って）いても
っづあが くとうやヨ	あなたのことは
うむゆすぶなりやが くとうや	思っている 女のごとは
ばしりらいんヨー	忘れられない

（『日本民謡大観』2）

〔訳〕 大海に出て走っていても、渡中に出て走っていても、あなたのことは、愛する乙女のごとは、忘れられないよ。

(3)あなたから離れられない

女の私があなたから離れられないという心を、魚が壺から離れられないことと対比する歌がある。壺とは、干潮時に周囲の岩が浮き出でできるリーフ内の小プールのことであろう。干潮時にもそこは水が溜まっているので魚にとって生存に都合のいい場所である。そこから外に出ると干上がるので、魚は離れられないのである。

〔資料87〕

ツボノ 魚（つぞ）ガマジヤンド イラヨ 可愛者（かなしや）ヨ
つばから 離りや 身（ど）や 持ちやいんよ
我ん ほなりやがままい

あたらす 者から はなりや 身(ど) 持ちやいんよ

(『西原民謡集』28)

[訳] 壺の魚さえ、ああ愛しい人よ、壺から離れては身が持たないものだ。女の私も大事なお方から離れては身が持ちません。

(4)あなたといっしょなら怖いものはない

二人の絆が深ければ、東平安名崎の離れのような不毛の地に追いやられても、怖いことはないという歌がある。

[資料88]

汝と吾とや、カナシャガマヨ	愛しい人よ、君と僕とは
東ぬ平安名ぬ、んなばなりんかい	不毛の東平安名の離れに
やらさばまいよ	追いやられようとも
あんみてーや、うどいてや	こわがることも、おじることも
あらでんまーよ	なかろうよ

(『伊良部村史』47)

[訳] あなたと私とがいっしょであれば、愛しい人よ、東平安名の不毛な離れに追いやられようとも、怖がることも、怖気づくこともないよ。

(5)あなたへの思いを織る

機織りは女性の仕事であるが、その辛い労働に愛を込めて織り上げていくことで、喜びに転化する。

[資料89]

たて機(はた)がまや
心(こゝろ)のあやだらよ
箴柄(なほきん)うたしゆる
音(なら)のがすよ
思(おも)ゆる肝(きむ)ゆど
男(びきりや)が事ゆど
織りや締めゝゝよ

(『註釋曲譜附 宮古民謡集』11)

[訳] 立て機は心の綾であろうよ、箴を打つ音のたびに、恋しい心を、男のことを織り込んでいくよ。

3 愛の確認

愛の確認の歌は①心の一体感、②体の一体感、③香りなどという心を表現する。

(1)心の一体感

心の一体感の歌は①体は別々だが心は一つ、②離れ岩は二人のよう、③二人の心は一つ、④大事な時はいっしょ、などという心を表現する。

①体は別々だが心は一つ

着物はたがいに別々のものを着ているが、二人の心は一つであるという形で、愛を確認することがある。体が別々なので着物も二つにならざるをえないが、しかし心は一つに結ばれている。着物・体と心を対比し、外面と内面の対照性を強調している。『城辺町史』は「私たち夫婦は、思いはいつも一つ、それぞれ着物だけは仕方がないから別々に着るにしても、心はいつも一つ、思いはいつも一つだよ。夫婦愛の歌。」と説明している。庶民の生活においては、相愛の恋人と夫婦を区別することが難しいばあいが多いだろう。

[資料90]

キンぬがみどう	着物だけは
うなが すーでいよー	別々に着けよう
すでいぬゆがみどう	袖だけは
うながー すーでいよー いー	別々に通そう
くくるゆがみゃー んにどうキ	心だけは
キむゆていがみゃー	思いだけは
んざぬが かわいが	どこが変わるものか

どうーたーよー

私たち夫婦は

〔『城辺町史』91〕

〔訳〕 着物だけは別々の袖である、袖だけは別々の袖である。心だけは、思いだけは、どこも変わらないよ、自分達は。

〔資料91〕

ちん やいばどう

着物であれば

うなが ちんちんによー

それぞれの着物着物（である）

すでい やいばどう

袖であれば

うなが すでいすでいよー

各自の袖袖（である）

ばたぬ なか

（ふたりの）腹の中

やいがソコがまや

心の底は

ひとつちどう やいよー

ひとつであるよ

〔『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ17」〕

〔訳〕 着物というものはそれぞれの着物である、袖というものはそれぞれの袖である。しかし、お互いの腹の中、心の奥底は一つであるよ。

〔資料92〕

着物（つん）ぬがみど

うなが つんつん なしういよ

袖（そで）ぬがみど

うなが 袖袖（そでそで）よ

肝の 中や

胸の 中やー 一つど やいよー

〔『西原民謡集』25〕

〔訳〕 着物こそそれぞれの着物である、袖こそそれぞれの袖である。しかし、お互いの心の中は、胸の中は一つであるよ。

[資料93]

きいんにやりやーどう	着物というものは、
うなが きいん	それぞれの着物である。
すでい やりやーどう	袖（着物）というものは、
うなが すでい	それぞれの袖である。
きいむがみや	肝（心）だけは、
やいがすく	奥底まで
びいていついさみゆー	ひとつである。

（『宮古のフォークロア』「即興歌トーガニ」12）

[訳] 着物というものはそれぞれの着物である、袖というものはそれぞれの袖である。しかし、お互いの心は奥底まで一つであるよ。

[資料94]

きんぬがみどう	着物だけが
うながーゆ きんきん	各自の着物着物（である）
シでいぬがみどう	袖だけが
うながーゆ シでいシでいよー	各自の袖袖（である）よ
キむぬゆ なかまん	肝の中も
んみぬゆ なかぬ	胸（心）の中も
かわじゆちや あらでいんまんよー	変わるということはありませんよ

（『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ7」）

[訳] 着物こそそれぞれの着物である、袖こそそれぞれの袖である。しかし、お互いの心の中、胸の中が別々ということはないですよ。

②離れ岩は二人のよう

平良から現在の久松集落の前身野崎村に行く途中に二つの離れ岩がある。これを向き合って暮らしている二人の姿と対比する歌がある。真正面から向き合っているというのは、二人の仲のよさを表す。

[資料95]

ぬぎきかい いきがちな 野崎に行きながら
ふたぢばなりう みあぎりばどうよ 二つ離れを見上げたところ
うヴぁとう ばんとうが お前とわたしと
まうきやどうり びじういにゃんゆ 向かい合って座っているようだよ
（『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ83」）

[訳] 野崎村に行きながら、二つ離れの岩を見上げたところ、あなたと私が向かい合って坐っているようだよ。

[資料96]

びさらからゆー まん 平良から
うりがつなんよー 下りながら（帰り路に）
ふたつばなりゆう 二つ離れを
みゃぎ みいりばどう よーい 見あげてみれば
うわぁとう ばんとうが 君と私とが
まうきやあやどうり 相い向いあうようにして
びゅうすんどう んーかいスよー 座っているのに似ている。
（そのように見えますね。）

（『平良市史』トーガニ17）

[訳] 平良から下りながら、二つ離れの岩を見上げたところ、あなたと私が向かい合って坐っているようだよ。

③二人の心は一つ

桜の花は色に、梅の花は匂いに美点がある。それと同じように、あなたと私は心が一つになっているところがよいのだ、と互いの愛を確認する歌である。

[資料97]

さくらのばなや 桜の花は
いろのゆいだらよ 色のせいだろうよ
んみがばなまい 梅の花も

においがまのゆいだらよ 香のせいだろうよ

(色と香のゆえに愛されたたえられている)

うわとばんとまい 君と僕とも

こころびてつの 心一つの

よいだらよ せいだろうよ

(『伊良部村史』17)

[訳] 桜の花は色のせいであろうよ、梅の花は匂いのせいであろうよ、あなたと私も心一つのせいであろうよ。

④大事な時はいっしょ

二人の関係を、昼は離れているが夜は一つになる雨戸のようだと比喻している。夜は二人の関係を深める貴重な時間帯であり、その大事な時にはいつもいっしょにいる、とすることで愛を確認し合うのであろう。雨戸が昼は離れるというのは、それぞれ別の戸袋に収まるからであらうか。それが夜になると隣接するイメージであらう。

[資料98]

つづあとう ばんとうや

ばすいやどうがまぬ

くくついさみゆー ヨイ

びいるや ばなり

ゆっざ びいていついがみどう やイ ヨーイ 夜はひとつである。

(『宮古のフォークロア』「即興歌トーガニ」26)

[訳] あなたと私は戸のようなものである。昼は離れていて、夜になれば一つで、いつも側にいる。

(2)体の一体感

体の一体感の歌は①水も漏れない仲、②形見を身に着けて、③体に触れたい、④縋りついていたい、などという心を表現する。隙間もないほどの体の接触を通して愛の確認をする表現である。

①水も漏れない仲

二人の間からは水さえ漏れないほど抱き合うことで、愛を確認しあう。「桶板のように」という比喩をもちいて、二人の間に隙間がないことを表現している。

[資料99]

つづあとう ばんとうが	あなたと私の
ばしがまから ヨー	間からは、
みずいがまやつム	水さえも
ふきんが しゃく ヨー	漏らないほどに、
たぐぬ ふりだき	桶のように
あやみや にゃーだ	割れ目がないように、
うかりや うらでい	抱き合っています。

(『宮古のフォークロア』「即興歌トーガニ」13)

[訳] あなたと私の間からは、水さえ漏れないほど、隙間のない、桶の板のように隙間なく抱き合っています。

[資料100]

つづあとう ばぬとうが	あなたとわたしの
ばしがまからやよー	間からは
にしゃやとう ばんとうが	愛しい人とわたしの
ばしがまからやよー	間からは
みじや とうんどう	水も通らない
むりんが しゃく だちどう	漏れないほど抱き合っています

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ25」)

[訳] あなたと私の間からは、青年と私の間からは、水は通らず、漏れることさえないほどに抱き合っています。

②形見を身に着けて

「私があなたに、二重の腰帯を織ってさしあげるから、私だと思って、あな

たの腰に巻いてください。女性が男性に帯を織って贈るのは、結婚承諾の意志表示であったという。恋歌。」と『城辺町史』は説明している。結婚承諾の意志表示であることはまちがいないとしても、自分の織った帯を愛の形見として、いつも腰に結んでいてほしいという願望を表現したものであり、それが互いの愛の確認を示す。

[資料101]

サーヨーイー	サーヨーイー	
うるぐすがまゆ	マーン	腰帯を
うりー	うやしばよー	織ってさしあげるから
ふうたいまーりやがまゆ		二重帯を
しみー	うやしばよーいー	締めてさしあげるから
ばんていや	うむいー	マーン 私だと思って
ぶなりやちゃー	うむいー	恋人だと思って
むすびや	ふいーるよー	腰に結んでください

(『城辺町史』90)

[訳] 腰帯を織って差し上げるから、二重回りの帯を締めて差し上げるから、私だと思って、乙女だと思って、結んでください。

③体に触れたい

愛する女性の体のすべてに触れてみたいと直接的に告げるような愛の確認の表現がある。おおらかな身体表現を通して愛を確認する歌である。

[資料102]

きゅーが	ゆや	いらよーまーん	今日の夜は	ねえ
かなしゃよー			愛しい人よ	
にかが	ゆーんかいや	いらよー	夜更けには	ねえ
ぶなりや			愛しい人よ	
うむゆシ	あにがま		思っている恋人の	
ういから	したんかい		上から下まで	

さぐりどう みーでい さぐってみたいものだ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ26」)

[訳] 今日の夜は、ああ愛しい人よ、夜更けには、愛しい女よ、愛する女の体を上から下まで探ってみたいものだ。

④縋りついていたい

いつも愛する女性と接触していたいという思いを指輪になって縋り付いていたいと表現することがある。これも体の接触を通した愛の確認の一つである。

[資料103]

うゆびがに とうんみゃばどう 指輪のように
いちぢがに ちゅんみゃい 五つ金(指輪)のように
つづあが ていーん なてい あなたの手になって
すまりゃが ていーん なてい 染めた女の手になって
シさがり まーりゆいゆ すがりついでいよう

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ16」)

[訳] 指輪のように、五つ輪の指輪のように、あなたの手に、愛しい人の手に、いつも縋りついていたいよ。

(3)香り

香りの歌は①あなたの香りがする、②あなたの香りは落ちない、などという心を表現する。遠くからでも相手の香りが感じられる、体に染み付いた相手の香りが水浴びをしても落ちない、など愛の深さを香りで確認する歌である。

①あなたの香りがする

自分の村に近づいた時、馴染んだ女性の香りがしてきて、相手を思い起こし、愛を確認する。体の香りという嗅覚を通して愛を表現している。

[資料104]

上比屋越(ういびあぐす)
島(すま)の東方(わあら) 乗來(のそき) ちからよ
汝(うわ)が香(かざ)や

我伍（あぐ）の香（かざ）や 打交（うつまづ）りよ

（『註釋曲譜附 宮古民謡集』23）

〔意譯〕 上比屋越（野崎村入口の坂）村の東方近くにさしかゝると、いとしお前の香は（吹く風に）交つてなつかしく匂って来るよ。

〔訳〕 上比屋越に、島の東方に近づいてきたとき、あなたの香りが、愛しい人の香りが、風にうち交じってきたよ。

さらさらと吹いてくる北風によって、あなたの香りが届く、このような感覚の中で愛を確認する歌である。

〔資料105〕

さらさら北風のうりばまい	さらさらと北風が吹いても
貴殿が香（かざ）のどゆるぎやが香のど	あなたの香は愛人の香は
あしや居るゝやあらんぬ	薫るばかりよ

（『宮古民謡選集』12）

〔訳〕 さらさらと北風が吹いても、あなたの香りが、愛しい人の香りがしてくる。

②あなたの香りは落ちない

契りを交わした男女は、たがいの香りが染み付いて、澄んだ井戸水を心ゆくまで浴びても、香りが落ちることはない。それほど相手の愛が体に染み付いているのを感じている、と強調する表現である。

〔資料106〕

あさがぬ みずゆば	朝井戸の水を
いらゆ かなしゃーよー	ねえ カナシャよ
きむゆぬ すりきゃー	心がさっぱりするまで
あみるばまいよーいー	浴びても
ウうゝ あがゆ かざぬどう	あなたの香りが
すまりゃが	スマリヤの

かざや んぎていや 香りが抜けることは
にゃーんによー ないよ

（『城辺町史』61）

〔訳〕 早朝の井戸水を、ねえ愛しい人よ、心ゆくまで浴びても、あなたの香りが、愛しい人の香りが抜け落ちることはないよ。

〔資料107〕

あさかぬ みじゆ 親井川の水を
いらよー かなしゃよー ねえ 恋人よ
ちむぬ シリイきゃー 心〈満足〉がゆくまで
あみりばまい 浴びても
っヴあが かじゃぬ お前の香りは
かなしゃが かじゃぬゆ 可愛い者の香りは
んぎていや にゃーん 脱げるものではないよ

（『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ20」）

〔訳〕 早朝の井戸水を、ねえ愛しい人よ、心ゆくまで浴びても、あなたの香りが、愛しい人の香りが抜け落ちることはないよ。

〔資料108〕

あさがぬ みず まん あみりばまい 親井川の水を浴びたとしても
キむ すりイきゃ あみりばまい 満足のいくまで浴びたとしても
うヴあが かざや お前の香りは
かなしゃが かざや 可愛い者の香りは
んぎちゃ にゃん 脱げるものではないよ

（『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ91」）

〔訳〕 早朝の井戸水を浴びても、心ゆくまで浴びても、あなたの香りは、愛しい人の香りは抜け落ちることがないよ。

4 讚美

讚美の歌は①器量、②航海能力などという心を表現する。

(1)器量

北の果てから南の果てまで、どこを探してもあなたを越える人はいない、と女性を讚美するものであるが、「越える」「凌ぐ」などが具体的に示す女性の属性が何であるかはっきりしない。容姿や能力などをふくめた全体的な器量のことと思われる。呼び掛ける相手が男性のばあいは、女性を抒情主体とした歌ということになる。どちらの事例もある。

[資料109]

んすんなつきー	北の果てまで
とみりばまいよ	探し（求婚）求めても
ばいんなつきー	南の極みまで
とみりばまいよ	求婚してみても
うわんこいのよ	あなた程（以上の）
あたらすみゃーぎんこい	いとしいあなた以上の
ものていやよ、にゃーんよ	乙女とはいわないのだよ

（『伊良部村史』24）

[訳] 北の果てに着くまで訪ねても、南の果てに着くまで訪ねても、あなたを越える、大切な方を越える、人はいないよ。

[資料110]

んすんなつきー	とうみりばまいよ	北の果てまで	南の果てまで
ばいんなつきー	とうみりばまいよ	さがし求めても	
ウウ あんくいぬ	かなしゃんくいぬ	いとしいあなたに勝る人は誰もいない。	
むぬていや	にゃーんよ		

（『五線譜のあやぐ』25）

[訳] 北の果てに着くまで訪ねても、南の果てに着くまで訪ねても、あなたを越える、愛しい人を越える、人はいないよ。

[資料111]

んすんなつきい とみりばまいよー
ばいんなつきい とみりばまいよー
うわんこいのよ あたらすみあぎんこいの
ものていやよー にあーんよー
（『伊良部郷土誌』25）

（大意）

はてからはてまで、探し求めたが、貴女が女の中で一番良かったとの意
〔訳〕北の果てに着くまで訪ねても、南の果てに着くまで訪ねても、あなたを
越える、大切な方を越える、人はいないよ。

[資料112]

にすいんな ついき マーン とうみりばまいよ
ばいんな ついき とうみりばまいよ マーンヨ ヨーイ
つう あんゆ しぬ マーン
かなしゃん しぬ ぶなりゃちや にゃーんよ マーンヨ
（『上野村の歌謡』1）

〔訳〕北の果てに着くまで訪ねても、南の果てに着くまで訪ねても、あなたを
凌ぐ、愛しい人を凌ぐ、乙女はいないよ。

[資料113]

さーよ 北んな つきー 探（と）みりばまいよー
南（ばい）んな つき 探（と）みりばまいよー
君（ふあ）ん しぬ まーん かなしゃん しーぬ 人でや
無（に）やーんーよー
変ラン 変ラン 何処（んざ）ヌガ 変ラガ
（『西原民謡集』54）

〔訳〕北の果てに着くまで訪ねても、南の果てに着くまで訪ねても、あなたを
凌ぐ、愛しい人を凌ぐ、人はいないよ。

[資料114]

んしんな チキ一	北の果てに着くまで
とうみりばまい	捜しても
はいんな チキ	南の果てに着くまで
とうみりばまい	捜し尋ねても
つヴあん くいぬ	あなたを越える
ぶなりゃ くいぬ	女を越える
シとうゆや にゃーんよ	(美しい) 人はいない

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ24」)

[訳] 北の果てに着くまで訪ねても、南の果てに着くまで訪ねても、あなたを越える、乙女を越える、人はいないよ。

[資料115]

にしんな チキ	北の果てに着くまで
とうみりばまいよ一	尋ねてみても
ばいんな チキ	南の果てに着くまで
さがしばまいよ一	捜してみても
うわん しぬ	あなたをしのぐ
かぬしゃん しぬ	恋人をしのぐ
ピとうちや みーんよ一	人といっちはいけませんよ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ6」)

[訳] 北の果てに着くまで訪ねても、南の果てに着くまで探しても、あなたを凌ぐ、愛しい人を凌ぐ、人は見えないよ。

[資料116]

にしんな チキ	とうみりばまい	北の果てに着くまで捜しても
ばいんな チキ	とうみりばまい	南の果てに着くまで捜しても
うヴあん しぬ		お前のような
かなしゃん しぬ		可愛い者のような

すまりゃちゃ じゃん 気に染むものはいないよ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ92」)

[訳] 北の果てに着くまで訪ねても、南の果てに着くまで訪ねても、あなたを
凌ぐ、愛しい人を凌ぐ、恋人はいないよ。

[資料117]

にスんな ツきー マーン	北の涯まで行き着いて
とうみるばまい まーんによー	求めても まことに
ばいんな ツきよー	南の涯まで行き着いて
さがしばまいよー	探しても
まーんによーいー	まことに
ウうゝ あん しぬ まーん	あなたのような
たウきゃん しぬ	一人のような
ぶなりゃちゃー にゃーんによー	女性は見当たらないよ

(『城辺町史』26)

[訳] 北の果てに着くまで訪ねても、南の果てに着くまで探しても、あなたを
越える、一人の人を越える、乙女はいないよ。

[資料118]

にスんな ツきー マーン	北の涯まで行き着いて
とうみるばまいよー	求めても
ばいんな ツきーまい	南の涯まで行き着いて
とうみばまいよー	探しても
マーンニョー イー	まことに
ウうゝ あん しぬ マーン	あなたのような
かなしゃん しぬゆ	カナシャのような
すまりゃてゃー	恋しい人は
にゃーんによー	見当たらないよ

(『城辺町史』23)

[訳] 北の果てに着くまで訪ねても、南の果てに着くまで訪ねても、あなたを凌ぐ、愛しい人を凌ぐ、恋人はいないよ。

[資料119]

にしinna ちいき とうみりばまいヨー	北に着き探しても
はいinna ちいき とうみりばまいヨー	南に着き探しても
っヴあん くいぬヨ	あなたを越える以上の
うむゆすぶなりゃん くいぬ	思っている女を越える
むぬぬどう あらでいがヨー	者がいるものか

(『日本民謡大観』10)

[訳] 北の果てに着くまで訪ねても、南の果てに着くまで訪ねても、あなたを越える、愛する乙女を越える、人がいましょうか。

[資料120]

にスんな ツきー	北の涯まで行き着いて
マーンニュー とうみりばまい	まことに 求めても
イラユー マーンニョー	それ まことに
ばいinna ツきー	南の涯まで行き着いて
さがしばまいよーいー	探しても
ウう あにゃーん ちぬ マーン	あなたのような
かなしゃん しぬゆ	カナシャのような
すまりゃていや	心に染まる人は
にゃーんによー	見当たらないよ

(『城辺町史』24)

[訳] 北の果てに着くまで訪ねても、南の果てに着くまで探しても、あなたのような、愛しい人を凌ぐ、恋人はいないよ。

[資料121]

北 (んす) んなつき	北の果てまで
-------------	--------

探（とみ）りばまいよ	探し求めても
南（ばい）んなつき	南の果てまで
探りばまいよ	探し求めても
汝（ヴぁ）んくいしぬ	お前ほどの
愛人（ぶなりや）んくいぬ	愛しいお前程の
人てや無（にや）んよ（そまりゃちゃにやーんよ）	人はいないよ

（『伊良部村史』41）

[訳] 北の果てに着くまで訪ねても、南の果てに着くまで訪ねても、あなたを越える、乙女を越える、人はいないよ。

[資料122]

んすんなつきー	とうみりばまいよ	北の果てまでさがし求めてみても
ばいんなつきー	とうみりばまいよ	南の果てまでさがし求めてみても
かなしゃがまよ		
ウウゝ あんくいぬ		あなたに勝る
ぶなりゃんくいぬ		恋人をしのぐような者は
むぬていーや にやーんよ		誰もいない
かなしゃがまよ		

（『五線譜のあやぐ』24）

[訳] 北の果てに着くまで訪ねても、南の果てに着くまで訪ねても、あなたを越える、乙女を越える、人はいないよ、愛しい人よ。

[資料123]

北極（んす）うとーんな つき 探（と）みりばまいよ
 南極（ばい）んな 着き 探みりばまいよ
 貴君（うば）ん しのー まん
 あたらす 友（あぐ）ん こいぬ
 人てや とみらいんよ

変ラン 変ラン 何処（んざ）ヌガ 変ラガ

（『西原民謡集』33）

[訳] 北の果てに着くまで訪ねても、南の果てに着くまで訪ねても、あなたを
凌ぐ、大切な方を越える、人は探せないよ。

[資料124]

サーヨーイー	サーヨーイー
にスんな ツキー	北の涯まで行き着いて
とうみりばまいよー	求めても
ばいんな ツキー	南の涯まで行き着いて
とうみりばまいよーいー	求めても
ウウゝ あん しぬ	あなたのような
たウきゃん しぬ	一人のような
あぐていや にゃーんによー	見当たらないよ

(『城辺町史』25)

「アグ 同年の友だち。同輩。」

[訳] 北の果てに着くまで訪ねても、南の果てに着くまで訪ねても、あなたを
凌ぐ、一人を凌ぐ、恋人はいないよ。

[資料125]

北 (んす) んなつき、とみりばまいよ	北の果まで探し求めても
南 (ばい) んなつき、とみりばまいよ	南の極みまで探し求めても
かなしゃがまよ	愛しい人よ
汝んくいぬよ、かなしゃんくいぬよ	お前のような、愛しい者ほどの
あぐてや無 (にや) んよ	友達はいないよ

(『伊良部村史』52)

[訳] 北の果てに着くまで訪ねても、南の果てに着くまで探しても、愛しい人
よ、あなたを越える、愛しい人を越える、恋人はいないよ。

[資料126]

サーヨーイー サーヨーイー

にスんな ツきー マーン	北の涯まで行き着いて
とうみりばまいよー	求めても
ばいんな ツきー	南の涯まで行き着いて
さがしばまいよーいー	探しても
ウうゝ あんにゆ しぬ マーン	あなたのような
びきりゃん しぬよー	男のような
かなしゃや にゃーんによー	カナシャは見当たらないよ

(『城辺町史』22)

「たとえ北の涯、南の涯とあちこちさがし求めたとしても、私にとってあなたほど恋しい男性は、まず他には見当たらないだろう。世界中であなたが一番、という趣意の歌で、婚礼歌の一つ。」

[訳] 北の果てに着くまで訪ねても、南の果てに着くまで探しても、あなたを凌ぐ、男を凌ぐ、愛しい人はいないよ。

[資料127]

にスんな ツきー マーン	北の涯まで行き着いて
とうみりばまいよー	求めても
ばいんにゆ むどおり	南の涯まで戻って
さがしばまいよーいー	探しても
まーんによーいー	まことに
ウうゝ あんにゆ しぬ マーン	あなたのような
びきりゃんにゆ しぬ	男のような
びきりゃてゃー	男は
にゃーんによーいー	見当たらないよ
ウうゝ あとうがみゃー まーん	あなたと一緒になら
びきりゃとうがみゃー	男と一緒になら
いらゆ	まことに
ばやーよーいー	私は
まーすや ふあいまい	塩をなめてでも

すからや ぬみまい 塩水を飲んででも
くらすとう すーでいよー 暮らすことができるよ

（『城辺町史』28）

[訳] 北の果てに着くまで訪ねても、南の果てに着くまで探しても、あなたを凌ぐ、男を凌ぐ、愛しい人はいないよ。あなたといっしょなら、男といっしょなら、私は塩をなめてでも、塩水を飲んででも、暮らすことができるよ。

[資料128]

みやくか なぎ イラマン 宮古中を それ
とうみるばまい マーンニョー 求めても まことに
くにとうゆ なぎ 国中を
さがしばまい 探しても
マーンニョーイー まことに
ウう° あん しぬ マーン あなたのよな
たウきゃん しぬ 一人のよな
びきりゃちゃー にゃーんによー 男性は見当たらないよ

（『城辺町史』27）

[訳] 宮古中を探しても、国中を探しても、あなたを凌ぐ、一人のお方を凌ぐ、男はいないよ。

讚美する相手ほどに美しい人を探すのはとても困難なことである。その困難さを夏の日照りの中で蝸牛を探すことに対比する表現がある。夏の日照りの中で蝸牛を探し出すような困難をおしても、なおあなたのような美しい人を探し出すことはできない、という形で相手を絶賛し愛を確認する。

[資料129]

なツびゃーいぬ イラマーン 夏の日照り下で
ムーな とうみ にゃーんによー かたつむりをさがすように
いすむーなう とうみにゃーん でんでんむしをさがすように
とうみるばまよーいー 苦労してさがしても

うう ^う あんゆ しぬ マーン	あなたのよう
あばらぎ ぶなりやがまていや	美しい女性は
とうみらるんよー	見当たらないよ

〔『城辺町史』70〕

〔訳〕 夏の日照りのもとで、かたつむりを探すように、でんでんむしを探すように、苦勞して探してみても、あなたを越える、美しい乙女は探せないよ。

(2)航海能力

空を飛ぶ鳥が越えられないような大海でも、自分の愛する人の船は越えて行けると讚美する形で、愛を確認する表現がある。空を飛翔する鳥の能力と船を操る恋人の航海能力を対比し、自分の恋人の能力をよしとするものである。なお、「あご」という単語には「友人・仲間」の意味もあり、そう解釈すると「友情の歌」になるが、この歌について、田島利三郎の『宮古島の歌』の注に「愛する人」とある。これにしたがって「恋の歌」と解釈した。

〔資料130〕

飛鳥が 飛や越えん	飛鳥の飛び越えないような
大海よまい やうい	大海をも
ばんが あごの ふねのがみど	わたしの友の船ばかりは
ぺりこえす やうい	走り越すよ

〔『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね53〕

〔訳〕 空を飛ぶ鳥が飛び越えられない大海でも、私の恋人の船だけは走り越えるよ。

〔資料131〕

とうびいとうりやが	飛ぶ鳥が
とうびゃーくいん	飛び越えられない
うぶとうゆまい ヨーイ	大渡〈大海〉さえも、
ばんが あぐぬ	私の友だちの
ふにぬがみどう	舟だけは

びりくいイ ヨーイ 走り越えている。

（『宮古のフォークロア』「即興歌トーガニ」14）

〔訳〕空を飛ぶ鳥が飛び越えられない大海でも、私の恋人の船だけは走り越えるよ。

5 秘密

秘密の歌は①二人の関係を秘密にする約束、②心の奥底を見せる、などという心を表現する。

(1)二人の関係を秘密にする約束

たとえ、どんなことがあっても、二人の関係を他人に口外しないようにと、相手の女性に依頼する歌である。海底の瀬が干上がるような、不可能なできごとがかりに起こったとしても二人の秘密を守り合おう、と愛の確認をするものである。

〔資料132〕

海（いむ）の 瀬（せ）の	海の瀬が
あらいでとんまいよ	表わに出るまでも
底（そこ）のよ 瀬（せ）の	底の瀬が
ぶかいでとんまいやうい	外に出るまでも
うわと ばんとが	お前とわたしとは
よなかごとよ いでんよ	夜半ごとに出まわることだよ
すまりやよ	恋人よ

（『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね58）

〔訳〕海の瀬があらわれ出ても、海底の瀬が外に出ても、あなたと私の夜中のことはあらわれないようにしようね、愛しい人よ。

(2)心の奥底を見せる

心の奥底まで男性にさらけだして愛を確認する女性を抒情主体にした歌であ

る。両親にも見せたことのない、心の奥深いところまで相手の男性に見せてしまったことが愛の証明になる。なお、類歌について『城辺町史』は「バタヌーナカガミ 「腹の中まで」。女陰を暗示している。」「ヤイガ スクガミ 「八重の底まで」。女陰を暗示している。」と「腹の中」「八重の底」を「女陰」を暗示すると説明しているが、うがちすぎではないか。「心の奥底」でよいと考える。

[資料133]

あさんな みしん とくくるユまい	父に見せない所まで、
ムまんな みしん とくくるユまい ヨイ	母に見せない所まで、
っヴぁんにやりどう	あなたにだから、
なきいなきいとう	泣く泣く
あきみしゅーい ヨーイ	開けて見せた。

(『宮古のフォークロア』「即興歌トーガニ」8)

[訳] 父にも見せない所までも、母にも見せない所までも、あなただから、泣く泣く開けて見せたのです。

[資料134]

うやムまい みしんにゆー	父にも見せたことのない
ばたぬゆー なかがみまいよー	腹の中までも
あんなムまい みしんにゆー	母にも見せたことのない
やいが すくがみまいよーいー	八重の底までも
ウうゝ あん やりばどう	あなたであるからこそ
すまりゃん やりばどう	スマリヤであるからこそ
あきや みしよー	広げて見せるのだ

(『城辺町史』72)

[訳] 父にさえ見せたことのない腹の中までも、母にさえ見せたことのない心の奥底まで、あなただから、愛しい人だから、開けて見せるのです。

[資料135]

ムまんな みしやーみーん

ばたぬ なか

あさんな みしやみーん

やいがすく

っヴあん やたりやーどう

あたらすい かなしゃん やたりやーどう

あきみしーにやーん

母にも見せたことのない

腹の中を、

父にも見せたことのない

(心の) 奥底を、

あなたにだから、

かわいい愛しい人にだから

開けて見せたのだ。

(『宮古のフォークロア』「即興歌トーガニ」 9)

[訳] 母にも見せたことのない腹の中を、父にも見せたことのない心の奥底を、あなただから、いとおいしい、愛しい人だから、開けて見せたのです。

6 愛の不変

不変の歌は①あなたをずっと愛す、②いつまでも向かい合っていよう、③心は変わらない、④二人の縁は切れない、などという心を表現する。

(1)あなたをずっと愛す

三線や胡弓などの楽器への惚れこみと、相手の女性への思いを対比し、楽器にたいする思いは一夜限りにすぎない、あなたにはこの世がある限り(百年)惚れ続けると、惚れ方の対照性を通して、相手への愛の不変を確認する歌である。

[資料136]

さんしんがまんな

しとうゆが ふり

くーきよーがまんな

かたゆが ふり

っヴあんかいや まーん

くぬゆぬ ある なぎ

三線には

一夜だけ惚れる

胡弓には

片夜だけ惚れる

あなたには ねえ

この世のある限り

ふりどう ういよー 惚れていよう

〔『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ32」〕

〔訳〕三線に惚れるのは一夜だけである。胡弓に惚れるの片夜だけである。あなたには、ああ、この世のある限り惚れているよ。

〔資料137〕

さんしんがまんな ピとうゆが ぶりだら 三味線には一夜だけ惚れる
なかづるがまんな ふたゆが ぶりだら 中三絃の糸には二夜だけ惚れる
かなしゃがまよ うりや ピきうズ それを弾いている
にしゃんかいや むむていが ぶりだら あなたには百年も惚れていよう
かなしゃがまよ

〔『五線譜のあやぐ』37〕

〔訳〕三線には一夜の惚れであるよ、中弦の糸には二夜の惚れであるよ。愛しい人よ、それを弾いている若者には百年の惚れであるよ、愛しい人よ。

(2)いつまでも向かい合っていよう

二人は死ぬまで一体である、死ぬまで心が向かい合っていよう、この世が続く限り向かい合っていようという、類歌群がある。これらは、松の葉が枯れ落ちても一つである状態と対比され、二人の関係もそのようにありたいと愛を確認しあっている。

〔資料138〕

まつぎが ぱーや いらまーん 松木の双葉は
すーんざき むぬよー うらやましい限りだ
かり うていきやーまい 枯れて落ちるまで
まウきやーどうりよーいー 向き合ったまま
ウう あとうゆ ばんとうまい あなたと私も
みやーくとう なぎな この世がある限り
まウきやーどう すーでいよー 向き合って暮らすつもりだ

〔『城辺町史』67〕

[訳] 松の木の葉は羨ましいものだ、枯れ落ちるまで向かい合っている。あなたと私もこの世がある限り向かい合っていようよ。

[資料139]

松の 葉や そんざぎ も一ぬよ
枯りや落(う) てんきやまい
前けや—どう—い よ—い—
自分達(どゆた) まい— 宮古と長げ
前きやどう—い—よ—
サーヨ 宮古ト長ヌ 夫婦 美ギサー

(『西原民謡集』51)

[訳] 松の木の葉は羨ましいものだ、枯れ落ちるまで向かい合っている。私達も宮古の続く限り向かい合っていようよ。

[資料140]

まつぎがば—や すうんざきむぬ	松の木の葉は 羨ましいもの
かりうていづきゃまい	枯れ落ちるまで
まウ きゃ—どうズよ	向かいあったまま
ばんたまい みゃ—くとうなぎ	わたしたちも島のある限り
まウ きゃ—どうズよ	向かいあっていようよ

(『五線譜のあやぐ』2)

[訳] 松の木の葉は羨ましいものだ、枯れ落ちるまで向かい合っている。私達もこの世のある限り向かい合っていようよ。

[資料141]

まつぎぬ は—や すうんじゃなむぬよ	松の葉は羨ましいものよ
かりうていづきゃまい	枯れ落ちるまでも
まウきゃ—どうズど—	向かい合っている
かなしゃがまよ どうゆたまい	わたし達も

みゃーくとうなぎや	この世のある限り
まウきゃーどうズドー	向かい合って（睦まじく）いよう
かなしゃがまよ	愛する人よ

（『五線譜のあやぐ』29）

[訳] 松の木の葉は羨ましいものだ、枯れ落ちるまで向かい合っている。愛しい人よ、私達もこの世のある限り向かい合っていようよ、愛しい人よ。

[資料142]

まつぎが ばや マーン	松木の双葉は
すーざき むぬよー	うらやましい限りだ
かりー うていきゃーまい	枯れて落ちるまで
まウきゃどう	向き合って
しゅーいよー いー	いるよ
ばんたゆまい んにどうキ	私達も まことに
みゃーくとう なぎんな	この世がある限り
まウきゃどう	向き合って
しゅーらでいよー	生きていこうよ

（『城辺町史』41）

[訳] 松の木の葉は羨ましいものだ、枯れ落ちるまで向かい合っている。私達もこの世のある限り向かい合っていようよ。

[資料143]

まつぎぬ ばーや すうざぎむぬ	松の葉は うらやましいものよ
かりうとスきゃ	前向きに居るよ
まうきゃどう そうでいよ	前向きに居るよ
ばんたまい みやくとうなぎ	私達も 宮古のあるかぎり
まうきゃどう そうでいよ	仲よく離れないで前向きに居たいよ

（『平良市史』トーガニ12）

[訳] 松の葉は羨ましいものだ。枯れ落ちるまで向き合っている。私達も宮古

の続く限り向き合っというよ。

『城辺町史』は次の事例について「夫婦和合のシンボルとされる琉球松の双葉。さて、松の双葉はうらやましい限りだ。枯れて落ちるまで、その向き合う形は変わらない。私たち夫婦も、いつまでも睦まじく向き合っ、幸せに暮らしていこう。婚礼歌。」と説明している。恋人と夫婦の距離ははかりがたいものがある。また、婚礼歌と相愛の不変の歌も近い関係にあることを示している。

[資料144]

サーヨーイー	サーヨーイー
まつぎが ばーや マーン	松木の双葉は
すみざき むぬよー	うらやましいこと
かりー うていイきゃーまい	枯れて落ちるまで
まウきゃーどうーりよーいー	向き合ったまま
ばんたゆまい マーン	私たちも
みゃーくとう なーぎ	この世がある限り
まウきゃどう すーでいよー	向き合って暮らしていこうよ

(『城辺町史』40)

[訳] 松の木の葉は羨ましいものだ、枯れ落ちるまで向かい合っている。私達もこの世のある限り向かい合っというよ。

[資料145]

まちぬ ふぁがまや しんざぎむぬ	松の葉は羨ましいものだ
さりーうちーきゃまい	枯れ落ちるまでも
まウきゃーどうい	抱き合っている
どうゆたまい	わたしたちも
くぬゆぬ ある なぎ	この世のある限り
しきんぬ ある なぎ	世間のある限り
まウきゃどうい	抱き合っというよ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ27」)

[訳] 松の葉は羨ましいものだ。枯れ落ちるまで向き合っている。自分達も、この世のある限り、世間のある限り、向き合っていよう。

[資料146]

まつぎが ばや	松木の双葉は
つんざぎ むぬ	うらやましい限りだ
イラユ マーンニョー	それ まことに
あい うていきゃーまい	枯れて落ちるまで
まウきゃーどうーりよーいー	向き合ったまま
どうーたーまい マーン	私たちも
くにとうゆ なーぎー	この世がある限り
まつあーき だーらーよー	一緒のままだよ

(『城辺町史』43)

[訳] 松の木の葉は羨ましいものだ、枯れ落ちるまで向かい合っている。自分達もこの世のある限りいっしょだよ。

[資料147]

サーヨーイー	サーヨーイー
まつぎが ばやゆ マーン	松木の双葉は
すんざぎ むぬよー	うらやましい限りだ
かり うていきゃーまい	枯れて落ちるまで
まウきゃーとういよーいー	向き合ったまま
ばんたゆまいゆ マーン	私たちも
いつぬ ゆ がみ	いつの世になっても
まウきゃーとういどう	向き合ったまま
すーでいよー	暮らしていこうよ

(『城辺町史』42)

[訳] 松の木の葉は羨ましいものだ、枯れ落ちるまで向かい合っている。私達もいつの世までも向かい合っていようよ。

[資料148]

まぢぎが ばや すんざきむぬ	松の木の葉は羨ましいもの
かりうていいきゃまい	枯れ落ちるまで
まうきゃどうりよ	向かい合ったままよ
ばんたまい シまとうなぎ	わたしたちも島のある限り
まうきゃどうりよ	向かい合っっていようよ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ74」)

[訳] 松の葉は羨ましいものだ。枯れ落ちるまで向き合っている。私達も村の
続く限り向き合っっていようよ。

[資料149]

松木(まつぎ)が 葉(ば)や	松の木の葉は
すうんざの ものよ	羨ましいのものよ
あいおてりぎゃまい	枯れ落ちるまでも
まうけば どりよ	相對しているよ
うわ'んてまいよ	お前たちも
命(むのち) あるまで	命のあるまで
まうきやば どりよ	相對しておれよ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね59)

[訳] 松の葉は羨ましいものだ。枯れ落ちるまで向き合っている。あなた(と
私)も命のある限り向き合っっていようよ。

[資料150]

まついぎーが ばーや	松の木の葉は
すんざな むぬ	うらやましいものだ。
かりうていいきゃーまい	枯れ落ちるまでも、
まヴきゃどうり ヨイ	おたがいいっしょだ。
つヴあとう ばんとうや	あなたと私は
すいにうしいきゃがみ	死んでしまうまで、

まヴきゃどうり ヨイ おたがいいっしょだ。

(『宮古のフォークロア』「即興歌トーガニ」6)

[訳] 松の葉は羨ましいものだ。枯れ落ちるまで向き合っている。あなたと私は死に失せるまで向き合っていよう。

[資料151]

サーユ

まつが	ば一どうムま	松の葉でさえも、
いらゆが	かなしゃ ヌ	ねえ愛しい人よ。
あいうていり	きゃがみ	こぼれ落ちるまで、
びいとうみ	どう やり ヌ	一心同体である。
つヴあとう	ばんとうまい	あなたと私も、
ぐくらくぬ	すいまがみ	極楽の島まで、
びいとうみ	どう やり ヌ	一心同体である。

(『宮古のフォークロア』「即興歌トーガニ」7)

[訳] 松の葉は、ねえ愛しい人よ。枯れ落ちるまで一身である。あなたと私も極楽の島まで一身である。

いつまでも向かい合っていたい、という二人の愛に対比する事象として、奥山のアダンを用いることがある。奥深い山の中で人知れず実りやがて落ちるアダンの実であるが、これらは熟するときも落ちるときもいっしょである。二人の関係もそうありたい、と確認する歌である。

[資料152]

ふかやまの	あだんのにゃーんよ	深山の(奥山の) アダンの実のように
びとんなみい	やみいん	人に見られることのない
あだんのにゃー	んどよ	アダンの実の如く
おてばんび	とみ	落ちるときも一緒
あいばんま	ぞな	熟するも一緒
まぞなど	ならでいよ	一緒になろうよ

（『伊良部村史』25）

[訳] 深山のアダンの実のように、人に見られることのないアダンの実のように、落ちるときもいっしょ、熟して零れ落ちるときもいっしょ、いっしょになるうよ。

東の空にあらわれて、毎日人が向き合っている太陽や月を比喻表現として用いて、それらに向き合うように、二人もいつも顔を向き合わせていたいと愛を確認する歌である。

[資料153]

あがりや ンみゃまり°	昇っていらっしやる
ていだがなすぬしゃくよ	お日様や
あがズんな たかまり° つつがなすぬしゃくよ	お月様のように
きゆうん あつあん みんないてゃーなどう	今日も明日も向い合い
みどうりゃいてゃーんどう うり° ぶすぬ	顔をあわせてばかりいたい
かなすむぬよ	愛する者よ

（『五線譜のあやぐ』13）

[訳] 上がっていらっしやる太陽のように、東に立ち上っていらっしやる月のように、今日も明日も、向かい合ってばかり、見詰め合ってばかりいたい、愛しい人よ。

(3)心は変わらない

島が朽ちるとか、海底が干上がるなどの、ありえない事態が起こったとしても相手への愛は不変であると言う形で愛を確認する歌がある。

[資料154]

すまぬ にぬ まーん	島の根が
ふうちいとぅままいよー	朽ちはてたとしても
いムぬゆ あうすぬ	海の青潮が
ズばだとう ならばまいよーいー	地肌となったとしても
かなしゃぬ やばでいしー	カナシャの柔ら手で
かうだき くくるや	抱いた心は

かわいていや にやーんによー 変わることはないよ

(『城辺町史』59)

[訳] 島の根石が朽ちることがあっても、大海の瀬が地肌となっても、愛しい人の柔らかい手で抱く心は変わることはないよ。

[資料155]

島ぬ根石 (にいす) ぬ

くちゆるぐとんまい

青潮 (あうそ) ぬ海瀬 (いんし) ぬ

地肌 (ずはだ) とならばまい

かなしやぬ柔手 (やはでい) ゆ

かい抱く心 (くくる) や

かわいちゃ無 (にやー) ん

(『伊良部村史』36)

島の根石の

くちはてるとも

青潮の底石が

陸地に変ろうとも

愛しい人の柔はだを

掻き抱く私の心は

変わりはしないよ

[訳] 島の根石が揺るぐことがあっても、大海の瀬が地肌となっても、愛しい人の柔らかい手を抱く心は変わることはないよ。

[資料156]

島 (すま) の根石 (ねいす) の

くちゆるぐとんまいよ

青潮 (あをそ) が海潮 (いんそ) の

地 (ち) ばだとならばまいよ

可愛者 (かなしや) が白手 (しるて) の

かい抱 (だ) く心や

変 (かは) るちゃ無 (にや) んよ

(『註釋曲譜附 宮古民謡集』12)

[訳] 島の根石が揺るぐことがあっても、大海の瀬が地肌となっても、愛しい人の白い手で抱く心は変わることはないよ。

[資料157]

シまぬ にぬ	島の根が
くちゆるきとんまい	朽ち果てても
おーすが いんすぬ	青潮が海の潮が
ジばだとう ならまい	地肌となっても
かなしゃが するていぬ かいだキ	可愛い者の白い手のように
くくるや かわいちゃ にゃん	心は変わることはないよ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ95」)

[訳] 島の根が朽ち果てても、青潮が、海の潮が干上がって地肌があらわれたとしても、愛しい女の白い手のように、まっ白い心が変わることはないよ。

[資料158]

島の根石の小揺ぐ(くちゆるず)とんまいヨ	島の地中の岩が小揺ぎすとも
青潮(あうそ)の海瀬(いんし)の	青海原の底が
地肌(ずばだ)とならばまいヨ	干上がって陸地となろうとも
可愛者(かなしゃ)の柔(やば)手ゆ	愛するお前を
かい抱くズ心や	抱きしめる心には
変るちゃ無あんヨ	何のかわりもないよ

(『宮古民謡選集』4)

[訳] 島の根石が揺るぐことがあっても、大海の瀬が地肌となっても、愛しい人の柔らかい手を抱く心は変わることはないよ。

二人の心が変わらないことをあらわすために、対比する事象として北極星を用いることがある。北極星の位置の不変性と二人の愛情を同類のものとして確認する歌である。

[資料159]

なつふゆかわらん にのぼのぼすがまー
ふもりていやにゃん びてつーぼすがまよー
うあとよーばんとまい

びてつぼすのにゃんど

つむのかわりていや あらでんまーんよー

(『伊良部郷土誌』 9)

(大意)

北極星が、同じ位置にある様に、二人の愛情も、この星の様に変わらない。

[訳] 夏冬変わらない北極星よ、曇ることのない一つ星よ、あなたと私も一つ星のように心の変わることはないよ。

[資料160]

なつふゆかわらぬ

にのばのぼすがまよ

ふもりていやにやーん

びてつ、ぼすがまよ

ヴあとよ、ばんとまい

びとつぼすにゃーんど

つむぬかわりていや

あらでんまーんよ

(『伊良部村史』 9)

夏冬変らない

北の星よ (北極星)

曇ることのない

一つ星よ

君と僕は

一つ星の如く

心がわりが

あつてなろうか

[訳] 夏冬変わらない北極星よ、曇ることのない一つ星よ、あなたと私も一つ星のように心の変わることはないよ。

二人の変わらない愛情を表現する時間状況として、「宮古のある限り」という形を用いることがある。宮古には「この世」という意味があるので、この世がある限り永遠に愛し合うことを確認する歌になる。

[資料161]

みゃーくとうなぎ あらばまいよ

すまとうゆぬなぎ あるらばまいよ

かなしゃがまよ つむ かわズていや

ンみぬ はなりていや

私たちがこの世のある限り生きていても

島のある限り生きていても

いとしい人よ心が変わる

心をはなれるということは

にゃーん ばずどー ないであろう

かなしゃがまよ

(『五線譜のあやぐ』28)

[訳] 宮古のある限り、島のある限り、愛しい人よ、心が変わることは、胸の
思いの離れることはないはずだよ、愛しい人よ。

[資料162]

みやくとうなぎ やらばまいヨー 宮古がある限りであっても

しいまとうなぎ やらばまいヨー 島のある限りであっても

ちいむぬ かわいていや 肝(心)が変わることは

んみぬ かわいていや あらでいんまいヨー 胸(心)が変わることは

ありえない

(『日本民謡大観』12)

[訳] 宮古のある限り、島のある限り、心が変わることは、胸の思いの変わる
ことはないよ。

[資料163]

さーよい (以下略) (ハヤシ)

みやことなぎ やらさばまい 宮古が永遠に存在しても

シマトなぎ やらさばまい 島が永久にあっても

チむ かわい 心が変わる

んみノ かわいていーや 胸(気持ち)が変わるといことは

あらでいんまいよー あるまいよ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ11」)

[訳] 宮古が永遠に続く限り、島が永久に続く限り、心が変わることは、胸内
が変わることはないでしょうよ。

心が変わらない理由を「あなたの母の諭しで夫婦になったのだから」と説明
する歌がある。親の教えに忠実であることは美德であり、それに従って心変わ

りするはずはないという愛の確認である。

[資料164]

君どが 母が一ど いらよ 可愛者よ
我んとど ういなてど 論しうらも一ぬ一よ
君と 我んと一が 肝ぬ 変わいて一や 無やんよ一
(『西原民謡集』26)

[訳] あなたの母親が私と一っしょになりなさいと論したのだから、あなたと私は心が変わることはないよ。

(4)二人の縁は切れない

二人の縁を対比する事象として鉄線を用いる歌がある。鉄線のように切れないものがたとえ切れて離れることがあったとしても、二人の縁はそうはならないと、愛の不変を確認するのである。

[資料165]

ふふうかにばすの つりいのつとむまいよ
なないむでてがにの つりいのつとむまい
うわとばんとが むすびうついんな一 つりいやのかんよ一
(『伊良部郷土誌』29)

(大意)

鉄線が切れて離れても、貴女と私が誓った縁は離れることはないとの意

[訳] 鉄線が切れて離れても、七重に曲がる指輪が切れて離れるとも、あなたと私とが結んでおいた縁は切れて離れることはないよ。

[資料166]

ふふうかにばすの つつってんまいよ	鉄線が切れても
なない、むで、てがに一	七重にまがる指輪でさえも
つりいのつとむまいよ	切れ離れても
うわとばんとが	君と僕とは
むすぶうつ、いんな	結んである縁は

つりいやのかんよ

切れて離れることはないよ

(『伊良部村史』29)

[訳] 鉄線が切れても、七重に曲がる指輪が切れて離れるとも、あなたと私とが結んでおいた縁は切れて離れることはないよ。

第二節 一時的な離別

一時的な離別の歌は、1 離れている、2 通う、3 待つ、4 会う、5 離れていく、などの局面の心を表現するが、これらはさらに微細な部分に区分される。一時的な離別の状況にあるときは、「愛の葛藤」の歌と同様に否定的な感情を表現することが多い。

1 離れている

離れている局面の歌は①道を忘れる、②一夜も離れることが出来ない、③伝言、などという心を表現する。

(1)道を忘れる

一夜、二夜の僅かの間も逢わなければ、時がずいぶん経過したように思え、また通った道も忘れるようだと、一時でも離れていることで時や場所の感覚が狂ってしまうことを誇張的に表現している。会いたくても会えない切なさを誇張する歌である。

[資料167]

ひと夜 めだか	一夜見なければ
とか ぱつか みいんだけ	十日二十日見ぬほどに
ふた夜 みだか	二夜見ないと
かようたる むつがみ	通った道まで
ぱつしり しゃく やうい	忘れるほどになった

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね89)

[訳] 一夜見ないと十日も二十日も見ないようだ。二夜見ないと通った道まで

忘れるほどだよ。

[資料168]

ぴいとうゆー みーだか	一夜見なかったら
とうか ばついか	十日も二十日も
みーんだき	見なかったようだ
ふたゆー みーだか	二夜見なかったら
かゆーたる ムついがみ	通った道まで
ばっしーい しゃく ヨーイ	忘れるほどだ。

(『宮古のフォークロア』「即興歌トーガニ」21)

[訳] 一夜見ないと十日も二十日も見ないようだ。二夜見ないと通った道まで忘れるほどだよ。

(2)一夜も離れることが出来ない

次の事例は、上句の意味がわからず、解釈が未確定である。下句を「一夜の離れ、片夜の離れもできない」と解釈すれば、「女を愛したために一夜も離れることが出来なくなってしまった」心情を表現したものと考えられる。

[資料169]

とりびごり ぶねん そまり	底冷えの寒さが骨にまでしみ
あごとまいの やうい	あごまで止まって
ぴとよの のき	一夜の語り
かた夜の しられりの やうい	片夜の話もされるものか (されない)

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね63)

[訳] 底冷えした骨もあなたの愛に染まり、あなたとは一夜の退き、片夜の退きも出来なくなってしまった。

[資料170]

とりびごり° ぶねん そまり°
あごとまいの やうい

びとよの のき°

かた夜の ばなれ しられり°の やうい

(田島利三郎『宮古島の歌』61)

〔訳〕 底冷えした骨もあなたの愛に染まり、あなたとは一夜の退き、片夜の退きも出来なくなりました。

(3)伝言

離れている状況の中で、コミュニケーションをとる手段として雲に思いを託そうという歌がある。雲が物言うものであるなら、手紙を託して交信するのだが、という思いである。なお、『伊良部村史』は、「ざお」を「情」と訳しているが、手紙の意味の「状」ではないだろうか。

[資料171]

かのふむがまの

あの雲が

ものずものやらば一

物言うものであったならば

しらくもがまの

白雲が

ものずものやらば

話すことができるならば

しろかみがまん

白い紙に

ざおやかきいうとい

情をかきおいて

おりんど

それに

むつあさよ一

持たせてやりたいものを

(『伊良部村史』5)

〔訳〕 あの雲が物を言うものであったならば、白雲が物を言うものであったならば、白紙に手紙を書いて、雲に持たせるのだが。

2 通う

通う局面の歌は①家族への発覚を恐れる、②通う辛さ、③通う喜び、④会えない空しさ、などという心を表現する。

(1)家族への発覚を恐れる

恋人のもとに通うときには、人目を避けることになるが、それが相手の家族のばあいがある。次の事例は、「二人の関係を家人に知られたくないので、自分が忍んで行く夕暮れ時には、音の立たない蕙の戸を下げて待っていてくれ」と頼む心情を表現している。

[資料172]

夕風（ゆうどり）がまんな	夕風には
イラ可愛者（かなしゃ）ヨ	愛しい人よ
板戸（ばすやど）がまや	板戸は
音高かりあヨ	音高くあれば（之を廃して）
鳴らぬ戸（と）	鳴らぬ戸を
蕙（むしる）の戸ゆ	蕙の戸を
下げ待ち居れヨ	下げ坐して待ってをれよ

（『宮古民謡選集』5）

[訳] 夕風の頃には、ああ愛しい人よ、板の戸は音が高いよ、鳴らない戸を、蕙の戸を、下げて待っていてくれ。

[資料173]

ゆーどりがまんな	夕なぎには
いらよ かなしゃよ	可愛者よ
やどうばすがまや	板戸は
うとだかかりや よーい	音が高いから
ならん やど まーん	音のでない（鳴らない）
むするやどうゆ	蕙を戸の代りに（蕙戸）
さぎ まちうりよー	下げて 待っていないさい

（『平良市史』トーガニ4）

[訳] 夕風の頃には、ああ愛しい人よ、板の戸は音が高いよ、鳴らない戸を、蕙の戸を、下げて待っていてくれ。

[資料174]

夕風（ゆうどり）がまんな
イラ可愛者（かなしや）よ
板戸（ばすやど）がまや
音高（おとだか）かりやよ
鳴（な）らぬ戸（やど）ゆ
蕙（むしる）ユ戸（やど）
下（さ）ぎ待（ま）ち居（を）りよ

（『註釋曲譜附 宮古民謡集』13）

[訳] 夕風の頃には、ああ愛しい人よ、板の戸は音が高いよ、鳴らない戸を、蕙の戸を、下げて待っていてくれ。

[資料175]

サーヨーイ	サーヨーイ
ゆうどうりがまんな	夕風ぎの時には
イラユ カナシュユー	アアヨー 愛シイ者ヨ
やどがちいがまんヨー	板戸は
うとうだかかりゃヨー	音が高いので
イー ならんやどー	イー 鳴らない戸の
むしるやとーり	蕙（むしろ）を取って
さぎまちゆりヨー	下げて待っていなさい

（『日本民謡大観』25）

[訳] 夕風の頃には、ああ愛しい人よ、板の戸は音が高いよ、鳴らない戸を、蕙を取って、下げて待っていてくれ。

[資料176]

ゆうどうりがまんな	夕風どきには
いらゆ かなしや	ねえ可愛い者よ
いつあやどがまや	板戸は

なジだかかりや きしむ音が高いので
ならん やどう (音の) 鳴らない戸
むしるやどう 箆の戸を
さぎ まちうり おろして待っていないさい

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ87」)

[訳] 夕風の頃には、ねえ愛しい人よ、板戸は音が高いので、鳴らない戸を、箆の戸を下げて待っていてくれ。

[資料177]

ゆーどうりやがまんな 夕風ときには
いらよー かなしゃ ねえ 愛しい人よ
ぱシやどうがまや 木の戸よ
うとうだかかりやよー 音が高いので
ならん やどうぬ (音の) 鳴らない戸の
むしるぬ やどうゆ 箆の戸をおろして
さぎー まていーうりよ (わたしの来訪を) 待っていないさい

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ18」)

[訳] 夕風の頃には、ねえ愛しい人よ、木の戸は音が高いので、鳴らない戸を、箆の戸を下げて待っていてくれ。

[資料178]

ゆどうりがまんな 夕風ときには
いらゆかなしゃよ ねえ可愛い者よ
やどうばすがまや 板戸は
うとうだかかりやーよ 音高いから (音の) 鳴らない
ならんやどう むしるやどう 戸簾の戸をおろして
さぎまちうりよ 待っていて下さい

(『五線譜のあやぐ』10)

[訳] 夕暮れ時には、ああ愛しい人よ、板の戸は音が高いよ、鳴らない戸を、

蕙の戸を、下げて待っていてくれ。

[資料179]

ゆーどりがまんな	夕風のときには
いらゆ かなしゃーよー	ねえ カナシャよ
やどうばすがまや	板戸は
うとうだか かりゃーよーいー	音高くあるから
ならんにゆ やどうー	鳴らない戸を
マーン むっすやどうゆー	それむしろの戸を
さぎ まち うりよー	吊して待っておれよ

(『城辺町史』60)

[訳] 夕風の頃には、ああ愛しい人よ、板の戸は音が高いよ、鳴らない戸を、蕙の戸を、下げて待っていてくれ。

[資料180]

サーヨーイ
夜静(ゆーどり)がまんな いらよ 可愛者一よ
はず雨戸(やど)がまの一
音(なり)だかかりやよーいー むしろ屋戸ー まーん
ならん 屋戸ーゆ 下(さ)げ 待ーちよーれーよー

(『西原民謡集』38)

[訳] 夕風の頃には、ああ愛しい人よ、板の戸は音が高いよ、蕙の戸を、鳴らない戸を、下げて待っていてくれ。

[資料181]

夕風(ゆうどり)がまんな	夕風のときには
イラユカナシヤヨ	ねえ、愛しい人よ
板戸(ばすやど)がまや	板戸は
音高(うとだか)かかりゃよーい	音が高く、(他人に気づかれるから)

鳴らん戸（やど）ゆ
筵戸（むしるやど）ゆ
下ぎ待ちゆうりよ

（『伊良部村史』37）

鳴らないムシロ戸を
ムシロ戸を
下げて待っていておくれ

[訳] 夕風の頃には、ああ愛しい人よ、板の戸は音が高いよ、鳴らない戸を、
筵の戸を、下げて待っていてくれ。

[資料182]

とり一のよーんな いらよがぶなりゃがま
ばすーやどがまの なりだかかりゃあよ
ならんがやどよー むしろがやどよー
さぎまーちうりいよー

（『伊良部郷土誌』24）

（大意）

雨戸は音が高いので、筵を下げて、待っていないさいとの意

[訳] 風の夜には、ああ乙女よ、板の戸は音が高いよ、鳴らない戸を、筵の戸
を、下げて待っていてくれ。

[資料183]

とりのよーんな
いらよぶなりゃがまよ
ばすやどがまや
なりだかかりゃよ
ならんがやどよ
むしろがやどよ
さぎまちゆうりよ

風の夜には
愛しい乙女よ
板戸は
音が高いから
音の立たない戸の
筵戸を
下げて待っていてくれよ

（『伊良部村史』22）

[訳] 風の夜には、ああ乙女よ、板の戸は音が高いよ、鳴らない戸を、筵の戸
を、下げて待っていてくれ。

(2)通う辛さ (休む瀬があればいいのに)

宮古島の平良から伊良部島にいる女のもとに舟で通うのであるが、途中で漕ぎ疲れた体を休める干瀬があればと願う心情を表現している。海が男女を隔てているが、その障害も干瀬があればなんとか克服することができるのという願いである。

[資料184]

ヤイヤーヨー	ヤイヤーヨー
いらぶとうがヨー ばしがまんユなヨー	伊良部島との間には
がまんユなヨー	
ばなりユーとうが ばしがまんなヨー	離れ(伊良部島の異称)との間には
イー ばたいいじのー まーん	イー 渡り瀬が ほんとに
ゆくいいユじーぬ あたつらむぬヨー	憩い瀬があつたらよいのに

(『日本民謡大観』23)

[訳] 伊良部島との間には、離れ島との間には、渡り瀬が、憩う瀬が、あればいいのだが。

[資料185]

いらぶとうが ばしがまんな	伊良部島との間には
ばなりゆとうが ばしがまんな	離れ島との間には
ばたジじぬ	渡る瀬が
ゆくジじぬ	休む瀬が
あていあなむぬ	あるよ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ84」)

[訳] 伊良部島との間には、離れ島との間には、渡り瀬が、憩う瀬が、あればいいのだが。

[資料186]

いらぶとうが ばしがまんな	伊良部島との間には
ばなりとうが ばしがまんな	離れ島との間には

ばたズじーぬ ゆくズじーぬ 渡り瀬が 休む瀬が
あてやーなむぬよ あればよいのに

(『五線譜のあやぐ』4)

[訳] 伊良部島との間には、離れ島との間には、渡り瀬が、憩う瀬が、あればいいのだが。

[資料187]

いらヴとが まーん 伊良部との
ばしがまんなよー 間には
ばなりゆとが 離との
ばしがまんなよー 間には
ばたすしぬ まーん 渡す瀬の
ゆくうしぬ 休む瀬の
あてぬ むぬよー あるとの ことよ

(『平良市史』トーガニ1)

[訳] 伊良部島との間には、離れ島との間には、渡り瀬が、憩う瀬が、あればいいのだが。

[資料188]

サーヨーイ
伊良部 (いらう) とがまーん
間 (ばし) がまんなよ
離 (ばな) りとが
間がまんなよ
渡 (ばた) す瀬 (じ) のまん
休 (ゆく) す瀬 (じ) ぬ
あてあなむぬよ

(『伊良部村史』31)

[訳] 伊良部島との間には、離れ島との間には、渡り瀬が、憩う瀬が、あれば

いいのだが。

(3)通う喜び

愛する相手のもとに通うときには、心が浮き立つこともあり、そのときには、どんな困難も気にならない。一歩歩くたびに石ころを蹴ってしまうようなひどい道だが、私は愛しているのだから、なんの問題もなく通いとおすよ、どんなに石ころ道であっても、舗装された道のように良く思われるよ、という心情を表現している。

[資料189]

礫石 (かいらいす) 股毎 (またかず) ん蹴 (け) りあしまいよ
我 (ばん) やりあど我伍 (あぐ) やりあど通 (かよ) ひ済 (す) ますよ
〔『註釋曲譜附 宮古民謡集』22〕

〔意譯〕石ころを一また毎に蹴散らしても(難儀な途を歩いても)われなればこそ愛人なればこそ、ひたすらに通ひつゞけてゐるよ。

〔訳〕一歩歩くたびに石ころを蹴散らしたとしても、私だから、友だから、ひたすらに通っているのだ。

[資料190]

野崎道 (のざきんつ) 石原道 (いさらんつ) やりばまいよ
我 (ばん) が思 (おも) ひ通 (かよ) ちから筵 (むしる) の上よ
〔『註釋曲譜附 宮古民謡集』18〕

〔意譯〕野崎へ行く道は石ころ道であるけれど、私が(お前を)戀ふて通ふたら筵の上を行くやうな感じがする。

〔訳〕野崎の道は石ころ道であっても、私が恋しい思いを抱いて通ったら、筵の上を歩くやうなものだ。

[資料191]

野崎道 (のざアきむつ)	野崎道
石原道 (いさらむつ) ど	石道
やりやまい やうい	であっても

はが おもひ 通ふちかあ わが思いが通ったならば
おきなうさ やうい 小石で突き固めた石粉道である

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね64)

[訳] 野崎の道は石ころ道であるが、私が恋人を思って通う時は、きれいな石道のようなのだ。

この嶺さえ越えたら、この谷さえ越えたら、彼女を抱いたのと同じだ、という形で、はやる思い、通う喜びを表現する歌がある。

[資料192]

嶺(んみ) ゆであん谷(そく) ゆであん越(く) えちからよ
取(と) り置(う) くと抱(だ) き置(う) くと同(ゆ) のものよ

(『註釋曲譜附 宮古民謡集』17)

[意譯] 嶺さへ谷さへ越したら、(お前を) 引き寄せて抱き締めたも同じだよ。

[訳] 嶺さえ、谷さえ、越えたなら、手に入れたのと、抱いたのと、同じだよ。

(4) 会えない空しさ

約束をして通っていても、なんらかの事情で会えないことがある。次の事例は、「夜中の一時まで待っても女と会えずに帰った」空しさを表現している。

[資料193]

こゝのつがみやアま 九つの鐘(夜の十二時)が鳴るまで
まちど をたり 待っておったが
やつのかねの なりたりやアど 八つの鐘(一時)が鳴ったから
からがらと よの むつん 空しく同じ道に
かへりたり やうい 帰っていったよ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね94)

[訳] 夜中の十二時までは待っていたが、一時になったので、空しく同じ道を帰ったよ。

3 待つ

待つ局面の歌は①待つ緊張感、②待つ辛さ、③船を頼りに通ってほしい、④ひたすら通ってほしい、⑤波を静めて招こう、⑥秘密、⑦抱きたい、などという心を表現する。

(1) 待つ緊張感

通って来る相手を心待ちにしているために、心は強く緊張している。次の事例は「男性の訪れを待つ時に、大きな北風の音にも、ささやかなそよ風の音にも過敏に反応する」女性の緊張感を表現している。

[資料194]

北風（にすかぜ）の おすばまい	北風が押ししても〈吹いても〉
さゝめきやの おとればまい やうい	（木の葉が）サッサッと落ちてても
うわびやむていど	お前かと
あごびやむていど	友かとぞ
おぶみ なれ やうい	大目になるよ（目を見張るよ）

（『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね66）

[訳] 北風が吹いても、そよ風が吹いても、あなたではないだろうか、愛しい人ではないだろうかと、目を見張ってしまうよ。

[資料195]

にすかじがまぬ ふきばまい	北風が吹いても
ささみきやがまぬ うしばまい	ささめき風が押ししても
うヴあびやーていどう	あなたかと
かなしゃびやーていどう	可愛い者ではないかと
うぶみなり	心がときめくよ

（『五線譜のあやぐ』12）

[訳] 北風が吹いても、微かな風が吹いても、あなたではないかと、愛しい人ではないかと、目を見張ってしまうよ。

[資料196]

にしかじがまぬ ふきばまい	北風が吹いても
ささみきゃがまぬ うしばまい	そよ風が押しても
うづあびやていどう	お前かと
かなしやびやていどう	可愛い者かと
うぶみ なり	思うことよ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ88」)

[訳] 北風が吹いても、そよ風が吹いても、あなたではないだろうか、愛しい人ではないだろうか、目を見張ってしまうよ。

[資料197]

北風 (にすかじ) がまぬ	北風が
吹きばまいよ	吹いても
ささみきゃがまぬ	(ちょっとした) 微風が
うさばまいよ	吹いても
貴女 (ヴヅあ) びやーんでど	貴方だろうか
かなしやびやーんでど	いとしいあなたかと
うぶみなり居いよ	そわそわしておるのだよ

(『伊良部村史』40)

[訳] 北風が吹いても、微かな風が吹いても、あなたではないかと、愛しい人ではないかと、目を見張ってしまうよ。

[資料198]

芥 (あふた) のかさてい
あしるばまいよ
木切 (きなぎ) のごろてい
動 (うゆ) けばまいよ
汝 (うわ) びやあと マーン
足音 (あすなら) びやあと

驚（おどろ）きゃ居（を）るよ

（『註釋曲譜附 宮古民謡集』9）

[訳] 芥がカサと動いても、木切れが動いても、あなたではないかと、足音ではないかと、驚いてしまうよ。

[資料199]

あふたぬ かさていゆ	芥がカサッと
うゆきばまいよー	動いても
きーきしがまぬ	木切れが
うゆきばまいよーいー	動いても
ウうゝ あびゃーていどう マーン	あなたではないかと
あすならびゃーていどう	足音ではないかと
うどうるき ういよー	驚いているんだよ

（『城辺町史』58）

[訳] 芥がカサと動いても、木切れが動いても、あなたではないかと、足音ではないかと、驚いてしまうよ。

[資料200]

芥（あふた）のカサていあしゆりばまいヨ	芥のカサという音がしても
木そぎのコロてい動（むゆ）きばまいヨ	木切がコロと動いても
貴方（うゝわ）びあてど足ならびあてど	あなたではないか足音ではないかと
驚き居るゝヨ	胸をとどろかしているよ

（『宮古民謡選集』3）

[訳] 芥がカサと音を立てても、木切れがコロと動いても、あなたではないか、足音ではないかと、驚いてしまうよ。

(2)待つ辛さ

愛する相手と逢うのは待ち遠しいものである。次の事例は、相手の家に通い、女性が門前に出て来るのを待っているが、その短い時間も待ちかねる心情を表現している。待ちかねる苦しさを、航海するときの苦しさと対比し、ほんの短

い時間であっても、愛する女性を待つほうが苦しいと表現する。

[資料201]

ふにがま はらすや ぐりふやにゃんヨ 小舟を走らすのはきつくはない
みちがま はらすや ぐりふやにゃんヨ 小舟を走らすのはきつくはない
あにがまやー いき お姉さん(愛しい人)の家へ行き
あにがまう まちいぬどう お姉さんを待つことが
どうちいぐりむぬヨー 大変苦しいものだ

(『日本民謡大観』3)

[訳] 船を走らせるのは苦しくはない、小船を走らせるのは苦しくはない。愛しいお姉さんの家に行って、お姉さんを待つのがひどく苦しい。

[資料202]

舟がま 走らすやー ぐりふや にゃんーよ
杉舟 走らすやー もつとど ぐりふや にゃんーよ
姉がま 家 行き 合いぬど
言葉 (ものい) 一声 合いぬど ゆう ぐりふや あーいーよー

(『西原民謡集』31)

[訳] 小舟を走らせるのは苦しくはない、杉船を走らせるのはそれほど苦しくはない。愛しいお姉さんの家に行って、言葉を一声聞く間がとても苦しい。

次の事例も、類歌であるが、大海を航海するときの苦しさと対比している。

[資料203]

青潮の ばなから 青海原の上から
船や べらしまありまい 船を走らせ廻るのも
ぐりっふア にゃん 苦しくはない
うわ'たが ざう きせ お前らの門に来て
うわ' 待つがまのど お前を待つ間が
とき ぐれかり やうい よほど苦しいのだ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね54)

[訳] 青潮の上から舟を走らせ回るのも苦しくはない。あなたの門前に来て、あなたを待つ間がとても苦しい。

[資料204]

荒潮（あらそ）がばなから
舟（ふね）や走（べや）らしよ
廻（まあ）るそまい
苦（ぐり）ふや無（にや）んよ
汝（うわ）たが門（ぞう）居（う）て
かなしゃゆ待（ま）つのど
どき苦（ぐり）かりよ

（『註釋曲譜附 宮古民謡集』15）

[訳] 荒海の上から船を走らせてまわるのも苦しくはない、あなたの家の門にいて、愛しい人を待つのがひどく苦しい。

[資料205]

あうすが ばなゆ	青潮の上を越えるのも
なぐいゆ くいすまい	大波の上を越えるのも
かーフふあ にやーんによーいー	苦しくはないよ
ううゝ あたが ざう きし	あなたの家の門まで来て
かなしゃゆ まつすどう	かなしゃを待つのが
どうキ ぐりむぬよー	とても心苦しいのだ

（『城辺町史』66）

[訳] 大海の上を、荒波を越えるのも苦しくはない、あなたの家の門に来て、愛しい人を待つのがひどく苦しい。

[資料206]

おーすぬ ばなから	青い海原から
ふにや ぴらしまーいまい	舟を走らせ廻っても

ぐりッふあ にゃーん	苦しくはない。
つヴあたが ぞー きい	あなたの門前に行って
つヴあ まついがまぬどう	あなたを待つのは
とうきい ぐりかイ ヨーイ	とても苦しい。

（『宮古のフォークロア』「即興歌トーガニ」15）

[訳] 青潮の上から舟を走らせ回るのも苦しくはない。あなたの門前に来て、あなたを待つ（少しの？）間がとても苦しい。

[資料207]

おーすが ばなゆ くいすまい	青潮の波を越えるのも
なぐい くいすまい	波を越えるのも
ぐりふにゃん	つらくない
うヴあたが ぞー きー	お前達の門まできて
かなしゃゆ まちすどう	可愛い者を待つのが
どうキ ぐりかイ	つらいことだ

（『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ89」）

[訳] 青潮の上を越えるのも、波を越えるのも苦しくはない。あなたの門前に来て、愛しい人を待つのがとても苦しい。

次の事例は、大海を航海するのではなく、池間島が離島であるため、辛い船旅には慣れているから、それよりも女性が表に出てくるのを待つ間が苦しいという歌である。

[資料208]

池間島（いきやますま）や	池間島は
いら かなしよ	ネ恋人よ
いむ越えがまの 島 やればまいよ	海を越えて行く小島であっても
船がま ひやらすッばら	小舟が通うから
いそがま ひやらすッばら	磯小〈舟〉が通うから
ばや ぐれさにゃんよ	わたしは苦しくはないよ

うわ' が ぎょう いけ	お前の門に行き
うわ' まつがまうど	お前を待つほうが
ばや ぐれしや ありよ	わたしは苦しいことであるよ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね56)

[訳] 池間島は、ねえ愛しい人よ。海を越えていく島なので、舟を走らせるのは、小舟を走らせるのは、私は苦しくない。あなたの門前に行って、あなたを待つ間が私は苦しい。

(3)船を頼りに通ってほしい

次の事例は、前に掲げた「通う途中に漕ぎ疲れた体を休める干瀬があればいいのに」という歌の願いをうけて、それに応答するもので、「舟そのものが体を休めるものである、舟を頼りにして乗って通っていらっしやい」と女性の諭すような、励ますような表現である。

[資料209]

ばたズじーや ふにがまだら	渡る瀬は 小舟だろう
ゆくズじーや みすがまだら	休む瀬は 御舟であろう
ふにたどうり みすたどうり	舟をたどり 御舟をたどり
かゆいんみゃちよ	通っておいでなさい

(『五線譜のあやぐ』7)

[訳] 渡り瀬は船であるよ、憩い瀬は小船であるよ、船を頼りにして、小船を頼りにして、通っていらっしやい。

[資料210]

ばたジじや ふにがまだら	渡る瀬は小舟であろう
ゆくジじや みすがまだら	休む瀬は御舟であろう
ふに たどうり	舟をたどり
みす たどうり	御舟をたどり
かゆい んみゃち	通っておいでなさい

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ85」)

[訳] 渡り瀬というのは舟がそれである。休む瀬というのは舟がそれである。舟を頼りにして、小舟を頼りにして通っていらっしやい。

[資料211]

ばたすしや まーん	渡る瀬は
ふにがま だりやよ	小船 だよ
ゆくスしや	休む瀬 は
みすがま だりやよ	水巢小 (がま) だよ
ふに たどり まーん	舟たどり
みすや たどり	水巢たどり
かゆい んみゃちよー	通って 参りなさいよ

(『平良市史』トーガニ2)

[訳] 渡り瀬というのは舟がそれである。休む瀬というのは舟がそれである。舟を頼りにして、小舟を頼りにして通っていらっしやい。

[資料212]

サーヨーイ
渡り瀬やまーん
船がまだらよ
休り瀬や
水巢 (みす) がまだらよ、ヨーイ
船たどり
水巢やたどり
通い参ちよ

(『伊良部村史』32)

[訳] 渡り瀬は船であるよ、憩い瀬は小船であるよ、船を頼りにして、小船を頼りにして、通っていらっしやい。

(4)ひたすら通ってほしい

ただひたすら通ってきてほしいと願望する、待つ人の心を強調的に表現した歌がある。

[資料213]

疲（ぶが）りちやす負（ま）けちや無（にや）まだなよ
たゞ参（んみや）ち通（かよ）ひ参（んみや）ち我（ばん）が親（おや）よ
（『註釋曲譜附 宮古民謡集』19）

[意譯] お疲れもお厭ひもあらせられず、ひたすらに通つてお出なさい我がいとしの君よ。

[訳] お疲れも気になさらず、嫌にもならないで、ひたすら通つてお出なさい、我がいとしの君よ。

(5)波を静めて招こう

離れた島にいる女のもとに通うためには、海の荒波が障害になることがあるが、それは自分の愛の力で鎮めるから通ってきてほしいと、待つ女性のがわから表現した歌がある。

[資料214]

ピさらばしぬ なぐいがまうばー 伊良部と平良の間の なごり(うねり)は
一里ばしぬ あらなながまうばー 一里の間の 荒波は
ばがていーしどう わたしの手でもって
ぶなりゃがていーしどう 女の手でもって
なだらきとうむすうでい ならかにしてお供します
（『五線譜のあやぐ』9）

[訳] 平良との間の荒波を、一里の間の荒波を、私の手で、乙女の手で、ならかにして、お招きしよう。

[資料215]

ピさらばしぬ なぐいがまうば 平良の間の波は
いちりばしぬ あらなむがまうば 一里の間の荒波は

ばが ていしどう	わたしの手でもって
ぶなりゃが ていしどう	女の手でもって
なだらき とうむすでい	なだらかにしてお供します

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ86」)

[訳] 平良との間の波を、一里の間の荒波を、私の手で、女の手でなだらかにしてお招きしましょう。

[資料216]

ピさら ばしぬゆ	伊良部と平良の間の
なぐいがまうばーよー	大波は
いちりが ばしぬ	一里の間の
あらなムがまうばーよーいー	荒波は
ばが ていーしどう	私の手で
ぶなりゃが ていーしどう	女の手で
なだらき	なだらかにして
うとうむ すーでいよー	お供をしよう

(『城辺町史』63)

[訳] 平良との間の荒波を、一里の間の荒波を、私の手で、乙女の手で、なだらかにして、お招きしよう。

[資料217]

ぴさらばしぬ まーん	平良との間の
なぐいがまをばよ	波小(なぐい) をば
いちりがばしぬ なぐいがまをばよ	一里の間の 小波をば
ばが ていしどう まーん	我が手で
ぶなりゃが ていしどう	彼女の手で
なだらき	和らげて
うとむ そでよー	お供しますよ

(『平良市史』トーガニ3)

[訳] 平良との間の波を、一里の間の荒波を、私の手で、女の手でなだらかにしてお招きしましょう。

[資料218]

ヤイヤー	ヤイヤー
ぴいさらばしぬユー うふなむむばヨー	平良との間の大波は
ゆるいばしぬ うふぶらぎゆむいヨー	佐良浜（地名）との間の大きく 折れる波を
ばがていーしどうヨー	わたしの手で
しるやふあでいーし なだきー	白い柔らかい手で
なだきー かゆさでいヨー	宥（なだ）めて〔あなたを〕 通わそうと

（『日本民謡大観』30）

[訳] 平良との間の大波を、佐良浜との間の大きく折れる波を、私の手で、白い柔らかい手で、なだらかにして、通わせよう。

[資料219]

平良ばしのなぐいがまをばヨ	平良と伊良部間の波風をば
一里ばしのなぐいがまをばヨ	一里道程の波風をば
吾が手しどぶなりヤが手しど	妾の手もて女の愛の手もて
なだらき通うさでヨ	なだらかにして通わせましようよ

（『宮古民謡選集』8）

[訳] 平良との間の荒波を、一里の間の荒波を、私の手で、乙女の手で、なだらかにして、通わせよう。

(6)秘密（家族への発覚を恐れる）

前出の「二人の関係を家人に知られたくないので、自分が忍んで行く夕暮れ時には、音の立たない蕨の戸を下げて待っていてくれ」と頼む歌に呼応するのが、次の事例である。鳴らない戸として蕨を下げておくようにとの言葉である

が、それがかなわないので、替わりに着物を下げて待っています、という歌である。

[資料220]

むしろが 戸（やど）や 下ぎらいにばーよ
音（な）らんが 戸や 下ぎらいにーばーよー
女 我が 着物（つん）がまうど
女（ぼなり）が 着物（つん）にやう 下ぎ 待ちやーでよー
（『西原民謡集』39）

[訳] 庭の戸は下げられないので、鳴らない戸は下げられないので、私の着物を、女の着物を下げて待っていきましょう。

(7)抱きたい

松の下で待っているからやってこい、そこでお前を抱こう、という直接的な愛の表現の歌である。多少語呂合わせ的であるので、笑いの歌かもしれない。

[資料221]

ヤイヤー	ヤイヤー
松（まつ）が下（した）んな	松の下で
待（ま）ちゃ居（う）らばよ	待っているから
ディキュウ ディキーティ	出来よう 出来ようで
ヤラウが下（した）から	ヤラウの木の下から
やらしゃ来（く）ばよ	やってくるから
汝（うゝわ）愛（かな）さいやのティ さーりぬ	おまえの可愛い人よ
サーリヌーティ	サーリヌーティ
カニウ木（ぎ）し羽（ばに）まわし	山ぶどうの葉を羽の ように巻いて
ぶなりゃがま	女よ
汝（うゝわ）取（とウ）りゃ抱（だ）かディよ	おまえをとって抱くよ

（『沖縄の民謡』1）

[訳] 松の下で待っているから、ヤラウの木の下からやっておいで、お前、愛

しい人よ。山葡萄の葉を巻くように、乙女よ、あなたを抱こう。

4 会う

会う局面の歌は①あなたを見ないと心が休まらない、②外で待っていて、③気配り、などという心を表現する。

(1)あなたを見ないと心が休まらない

次の事例は、たとえ雨に濡れるようなことがあったとしても、あなたに会わずには気が休まらないという心を表現している。そのような思いで通ってきて、今会った局面での告白と考えられる。

[資料222]

びといや むめ	一重は濡れ
わあいや むめばまい やうい	うわべは濡れても
うわ みだな	あなたを見ずに
かなしや みだな	恋人を見ずには
やすまれん やうい	安心はできない

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね85)

[訳] 一重の着物が濡れ、うわべがずぶ濡れになっても、あなたを見ないでは、愛しい人を見ないでは、心が休まらないよ。

(2)外で待っていて

裏座に忍び込んできた男性にたいして、外で待っていてくれ、父母が寝たら私も出て行って一緒になろう、という歌である。

[資料223]

むつないでいまち にしゃいがまよー ざをんないでいまち
にしゃいがまよー あんたと おやとが やすまーまーば
いでいつちい びとみならよー

(『伊良部郷土誌』26)

(大意)

彼氏に、今暫く道か門に待っていて下さい。父母が床についてから、出て来て一緒にになりますとの意

[訳] 道に出て待っていてください、若者よ、門に出て待っていてください、若者よ。母と父がお休みになったら、出てきていっしょになりましょう。

[資料224]

んつんないで一まち	道に出て待っていてくれ
にしゃいがまよ	若者よ (二才)
ざおんないで一まち	門に待っていてくれ
にしゃいがまよ	若者よ
あんなと、うやとが	父と母とが
やすままらば	お休みになったら
いでつてい	(わたしが) 出て来て
ぴとみなやよ	一緒になろうよ (愛しい人よ)

(『伊良部村史』23)

[訳] 道に出て待っていてください、若者よ、門に出て待っていてください、若者よ。母と父がお休みになったら、出てきていっしょになりましょう。

(3)気配り

次の類歌群は、逢瀬の時を過ごし、帰宅するまでの時間をゆっくり休んで下さいと、相手に気配りをする女性の気持ちを表現している。通ってきた男性は、早朝、人目を避けて帰らなければならないが、それまでのしばしの間、寝過ごすことがないように、鶏や犬が鳴く時が来たら起こしますから、ゆっくり休んで下さいと、愛の気配りをしているのである。

[資料225]

とういぬ なかばどう	一番どりが鳴き出したら
うくさでい やりゃーよー	起こしてあげるから
いんぬゆ ぶいば	犬が吠えだしたら
うくさでい やりゃーよーいー	起こしてあげるから

キむ ゆるし マーン 気を許して
ムみや ゆるし ゆかーまちよー 心を休めてお休みなされ
（『城辺町史』62）

〔訳〕 鶏が鳴いたら起こしますから、犬が吠えたら起こしますから、心を許して、胸内を許して、お休み下さい。

[資料226]

とうーい なかば 鳥が鳴いたら
うくさでい やりゃー 起こしますから、
いんぬ ぶいば 犬が吠えたら
うくさでい やりゃー 起こしますから、
ムみ ゆるし 胸〈心〉を許し
きいむ ゆるし 肝〈心〉を許し
にっづい うり 寝ていなさい。

（『宮古のフォークロア』「即興歌トーガニ」10）

〔訳〕 鶏が鳴いたら起こしますから、犬が吠えたら起こしますから、胸内を許して、心を許して、ゆっくり寝ていて下さい。

[資料227]

とういぬ なかば 鶏が鳴けば
うくさでい やりゃよー 起こしてあげますから
いんぬ ぶゆば 犬が吠えれば
うくさでい やりゃーよ 起こしてあげますから
チむ ゆるし 肝〈心〉を許して
んみ ゆるし 胸を許して〈安心して〉
ゆくい うらまてい お休みなさい

（『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ19」）

〔訳〕 鶏が鳴いたら起こしますから、犬が吠えたら起こしますから、心を許して、胸内を許して、ゆっくりお休み下さい。

[資料228]

鶏（とい）ぬ啼かば	朝鶏が鳴いたら
起（うく）さでやりゃーよ	起こしてあげよう
犬（いん）ぬ吠（ぶ）いば	（朝になって）犬が吠えれば
起さでやりゃーよ	起こしてあげようよ
肝（つむ）ゆるし、胸（んみ）ゆるし	肝心安心して
休（ゆく）いうらまち	休んでいて下さい

（『伊良部村史』38）

[訳] 鶏が鳴いたら起こしますから、犬が吠えたら起こしますから、心を許して、胸内を許して、お休み下さい。

[資料229]

鶏（とず）の啼かば起さでやりあヨ	鶏が啼き出さば起そうほどに
犬（いん）の吠（ぶ）えば起さでやりあヨ	犬が吠えなば起そうほどに
肝ゆるし胸ゆるし	気をゆるし心を安めて
ゆくいうらまちヨ	お休みなされよ

（『宮古民謡選集』7）

[訳] 鶏が鳴いたら起こしますから、犬が吠えたら起こしますから、心を許して、胸内を許して、お休み下さい。

[資料230]

鶏（とり）の鳴（な）かば
起（おこ）さでやりやよ
犬（いん）の吠（ぶ）えば
起（おこ）さでやりやよ
胆（きむ）ゆるしマーン
胸（むな）ゆるし休（ゆく）ゆらまちよ

（『註釋曲譜附 宮古民謡集』14）

[訳] 鶏が鳴いたら起こしますから、犬が吠えたら起こしますから、心を許し

て、胸内を許して、お休み下さい。

[資料231]

犬 (いん) の 吼 (ぼ) えば	犬が吠えれば
起 (おこ) さで やりやよ	起そう
鳥 (とり) 鳴 (な) きが まん	鳥が鳴けば
起さで やりやよ	起そう
すまりやよ	恋人よ
肝 (きも) ようろうせよ	心許せよ
思 (むめ) ゆるせ やすままちよ	心を許し休まれよ
かなしやよ	恋人よ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね57)

[訳] 犬が吠えたら起こしますから、鶏が鳴いたら起こしますから、恋しい人よ。心を許して、胸内を許して、ゆっくりお休み下さい、愛しい人よ。

[資料232]

とイぬ なかば うくさでい やりゃ	鶏が鳴けば起こしてあげます
いんぬ ゆばいば うくさでい やりゃ	犬が吠えれば起してあげます
んみ ゆるし	胸を許し
キむ ゆるし	心を許して
やすままち	お休みなさい

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ90」)

[訳] 鶏が鳴いたら起こしますから、犬が吠えたら起こしますから、胸内を許して、心を許して、ゆっくりお休み下さい。

[資料233]

鶏 (どり) の 鳴かば	起さでやりやゆ
犬 (いん) の 吠 (ぶ) いば	起 (うく) さでやりやゆ
肝ゆるし	胸 (んに) ゆるし
	寝 (ゆく) ゆらまちよ

(『宮古史伝』 7)

[訳] 鶏が鳴いたら起こしますから、犬が吠えたら起こしますから、心をゆるして、安心して、休んでください。

[資料234]

鳥 鳴つがまんな 起かさで やらよ
犬 (いな) 吠 (ぼ) いがまんな 起かさで やーりやよ
女 よーい 肝や ゆるまし [胸] (んみ) や ゆるましー
ゆくゆらまーちーよー

(『西原民謡集』 40)

[訳] 鶏が鳴いたら起こしますから、犬が吠えたら起こしますから、心を緩めて、胸内を緩めて、お休み下さい。

[資料235]

犬 (いん) の 吼 (ぼえ) ば
起 (おこ) さで やりやよ
鳥 (とり) 鳴 (な) きがまん
起さで やりやよ
すまりやよ
肝 (き) も ようろうせよ
思 ([む] (ん) め) ゆるせ やすままちよ
かなしやよ

(田島利三郎『宮古島の歌』 55)

[訳] 犬が吠えたら起こしますから、鶏が鳴いたら起こしますから、愛しい人よ、心を許して、胸内を許して、お休み下さい、愛しい人よ。

5 離れていく

離れていく局面の歌は離れていく辛さを表現する。逢瀬を過ぎて帰るとき、相手のもとを離れることが堪えがなくて、今夜にもまた逢いたいとか、愛しい

女性の体を離れたいとか、生爪が剥がれるように心が痛むなどと離れていく心情を表現する。

(1)離れていく辛さ

次の事例は、女性と別れていくのが辛く、早速、今夜にでも逢って遊びたいと訴えている。離別の時点でもう次の逢瀬を思っているのである。

[資料236]

ぬきーはいぬ	ぐりさがま	退きはい（別れ）の苦りさよ
はなりーはいぬ	ぐりさがま	離れることのつらさよ
あちやが	ゆーんかい	明日の夜にでも
にかが	ゆーんかい	夜更けにでも
きしや	あしばでい	来て遊びましょう

（『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ31」）

[訳] 退いていくのが苦しい。離れていくのが苦しい。明日の夜にでも、夜更けにでも来て遊びましょう。

次の事例は、体を絡めて共寝をした女性が愛しくて、その体から離れていけないと、離別の、辛い心情を訴えている。これも離れていく辛さを表現した歌である。

[資料237]

あたらきぬ	しらうでいまくら	大切な白腕枕
しらうでいまくらぬ		白腕枕
ゆらいぬ	またがま	手足をからませて
なう	ちゃじどう	何と言っても
いか	ちゃじどう	如何言っても
ぬきや	はらでいが	別れて暮らせようか

（『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ30」）

[訳] 大切な白い腕枕、絡ませた股を、なぜどのようにして退いていけようか。

次の事例は、愛しい女から離れていく辛さを、生爪が剥がれるほどであると、比喩を用いて心の痛みを訴えている。最初の事例は、いわゆる「後朝の別れ」であるが、後の二例は、破綻の別れとも解釈できる。

[資料238]

なまじゃーかん うき	このような暁に起きて、
つヴぁとう ばなり びすや	あなたと離れていくのは、
なまジみぬ	生爪が
んぎばなりば しゃくどう うむー	剥がれていくようにつらい。

(『宮古のフォークロア』「即興歌トーガニ」11)

[訳] 暁に起きて、あなたと離れていくのは、生爪が剥がれるほどに心が痛むよ。

[資料239]

ウうゝあとうゆ ばなりば	あなたと 離れるのは
いらゆー かなしゃーよー	ねえ カナシャよ
かなしゃとう ばなりゆーばー	カナシャと離れるのは
なまズみがまぬよーいー	生爪が
にくばなり すー だき	肉離れるほどに
あてい かなスかりば	とても痛くて悲しいことなので
ばなりや しらるんによー	離れることはできないよ

(『城辺町史』64)

[訳] あなたと離れるのは、ああ愛しい人よ、愛しい人と離れるのは、生爪が肉から離れるほどに、とても悲しいので、離れることはできないよ。

[資料240]

うヴぁとうゆ まん ばなりゆば	お前と ああ 離れることは
かなしゃとう ばなりうば	可愛い者と離れることは
なまジみぬ にくとう	生爪が肉と
ばなり	離れるほどに

しやくどう うむー

いたく思っていることだ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ93」)

[訳] あなたと離れると、愛しい人と離れると、生爪が肉と離れるほどに心が痛むよ。

第三節 愛の葛藤

関係が成立している状況にあっても、恋愛をめぐる問題は複雑であり、平穏な状態よりもむしろ葛藤状態におかれることが多い。琉歌などではこの領域を表現した歌が数多くみられる。だが、愛の葛藤を表現したトーガニは意外と少ない。①評判、②対立などの表現があるのみである。

1 評判

次の二例はセットである。前の歌は「あなたを見ようとしたために、夜中も真昼も出回る人だ」という評判が立っている、遊び人と評判されているのが辛い」と訴えている。それに答えて、後の歌は「夜中も真昼も出回る人だと言われてもいいじゃないか、そう評判を立てる人と結婚するわけではないのだから」と慰めている。世間の評判が愛の葛藤の原因を成している歌である。

[資料241]

ウうゝ あ みーでいぬ	あなたを見たい
ツみゃーがまんどうよー	ために
かなしゃゆ みーでいぬ	カナシャを見たい
ツみゃーがまんどうよー いー	ために出歩いて
ゆなかまりゃーていまい	夜の遊び人だと
さなかゆまーりゃていー	真昼の遊び人だと
あいあり にゃーんによー	言われてしまったよ
ばやーよー 私は	

(『城辺町史』78)

[訳] あなたを見ようとしたために、愛しい人を見ようとしたために、夜中回る人と、真昼出回る人と、評判になっているよ、私は。

[資料242]

ゆなかまりゃーていまい	夜の遊び人だと
あいあば ムつあよー	言われてもいいじゃないか
さなかゆまーりゃてい	真昼の遊び人だと
あいあば ムつあよ いー	言われてもいいじゃないか
あいそーとうぬ まーん	そう言った人と
ゆムそーとうぬゆ	そう詠んだ人と
どうゆ むたでいぬよー	所帯を持つわけではあるまい

(『城辺町史』79)

[訳] 夜中回る人と言われてもいいじゃないか、真昼出回る人と噂されてもいいじゃないか、そのように言う人と、評判を立てる人と、所帯を持つわけではあるまいに。

2 対立 (主張と反論)

相愛の関係が成立しているばあいでも、相手の愛を疑うことがある。次の二例はセットである。前の歌は、相手の女性にたいして「あなたを疎かにしていない、愛している」と主張するが、後の歌は、男性の主張にたいして「あなたは私を疎かにしている」と反論している。だが、まだ破綻の段階ではない。

[資料243]

雨小 (あめがま) の	小雨が
みたれたれ 降ればまい	ちよいちよい降るけれども
いつが いつ	いつの日か
うわ'が 家 (や) よ	あなたを
あましみいりが やうい	疎んじたことがあるか

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね87)

[訳] 雨が降った時でも、どんな時でも、あなたの家に通うのをおろそかにし

たことはなかったよ。

[資料244]

あまさんちいの あんさでの	御無沙汰せぬというのか
つやなげんちいの あんさでの	離れぬというのか
あますのど	御無沙汰が
つやなげのど	離れることが
おふかり やうい	多いことだ

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「宮古島の歌」たうがね88)

[訳] 私の家に通うのを、おろそかにしないというが、うち捨てないというが、実はおろそかにすることが、うち捨てることが多いよ。

3 眠い罪はあなたが被れ

次の事例は「眠(に)うた目罪がま・苦(く)ゆた眠罪がま」の意味がはっきりしない。睡眠不足の辛さをいうのか、あるいは共寝の露頭をいうのかわからない。いずれにせよ、この罪は男であるあなたが被れというのである。

[資料245]

眠(に)うた 目罪がまや 貴男 かぶりよ
青年(にせい)やがまよ一
苦(く)ゆた 眠罪がまや 貴男 かぶりよ
青年やがまよ 六月 日照(ひやい)の
らん傘がまう かうにやん
あみか一ぶりよ にせいがま一よ
サーヨーイ

(『西原民謡集』42)

[訳] 眠った罪はあなたが被れ、若者よ、苦しい眠りはあなたが被れ、青年よ。六月の日照りの頃、洋傘を被るように、罪を浴びるほど被れ、若者よ。

第三章 関係の破綻

破綻の局面の歌は①未練（愛を断ち切れない）、②未練（今でも自分の恋人だと思っている）、③未練（成す術がない）、④素知らぬ顔をするな、などという心を表現する。

1 未練（愛を断ち切れない）

破綻が決定的になった状況においても、なお未練は残る。あなたと共寝をした床が明日からは他の女のものになるかと思うと辛い。二人抱き合ったときの思いがよみがえり、断ち切ることができない。未練の歌である。

[資料246]

ううゝ あとうゆ ばんとうが	あなたと私が
にウたい ゆかにがままいよー	一緒に寝た床も
あつあが ゆーからや	明日の夜からは
ピとう だみ ならでいってい	他の女のものになるかと
うむいばどう	思うと
うむいばていていや しらるん	思いきることはできない
ウうゝ あとうゆ ばんとうが	あなたと私が
かふうだき くくるぬよー	抱き合ったその心が

（『城辺町史』73）

[訳] あなたと私が寝た床も、明日の夜からはよその女のものになるかと思う
と思切ることにはできない、あなたと私が抱き合ったその心が。

2 未練（今でも自分の恋人だと思っている）

次の二例はセットである。前の歌は、他人の嫁になった女性にまだ未練を残す男の心情を表現している。それに応答する形で、後の歌は、他人の嫁になっても心は変わらないが、あなたとどのように付き合っていけばよいかわからない、ととまどいの心情を表現している。ともに未練を残してはいるが、両者の心情には隔たりがある。

[資料247]

ひとが ていーんな いきゅらばまい	人の手に行(渡)っても
よそが ていーんな なりゅらばまいよー	他人の手になってからも
ばんが むていだらていどう	わたしのものと思っていた
にしゃやが むていていどう	男のものだと
うむいや ういよー	思いはしている

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ38」)

[訳] 他人の手に渡っても、他人の嫁になっても、私のものだと、青年のものだと思っているよ。

3 未練(成す術がない)

[資料248]

ひとつが ていーんな	人の手に
いきからよー	行ってからも
よそが ていーんな	他人の手に
なりからよー	なつてからも
ばが ちむやー	わたしの心は
ぶなりやが んみーやよー	女の胸は
かわいていや にゃーんよー	変わるということはない
いじゃまい かわらんシが	どこも変わらないが
また なお ひらいでいが	また何もできない

(『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』「トーガニ39」)

[訳] 他人の手に渡っても、他人の嫁になっても、私の心は、女の胸内は変わることはないよ。少しも変わらないが、しかしどう付き合えばよいのでしょうか。

4 素知らぬ顔をするな

『城辺町史』は「あなたとは別れたから、もう他人だと思って、素知らぬ顔で歩くな。人は別れたあとに、恋しさはますます募るのだ。男女の別れ歌。」

と説明する。破綻後の付き合い方の一端を示した歌。

[資料249]

サーヨーイー	サーヨーイー
ぴらば ピとうまーんていぬ	別れたからもう他人だと
まーいな	素知らぬ顔で歩くな
イラヨー	ねえ あなた
ぬかば しきんにゆていぬ	退いたからもう世間の人だと
まーいなよーいー	素知らぬ顔で歩くな
パイが なかどうゆ	別れたあとに
ぬキが なかどう	退いたあとに
かなスかりゃーよー	恋しさはますます募るのだ

(『城辺町史』87)

[訳] 別れたからもう他人だと、素知らぬ顔で歩くな、離れたから世間の人だと、素知らぬ顔で歩くな。別れた後こそ、離れた後こそ、愛しいよ。

[付記]

歌詞を引用するに際して、原典の歌詞と対訳をそのまま掲げたが、それとは別に、筆者による〔訳〕を追加した。歌詞の解釈が原典とは異なることを示すと同時に、分類の根拠をも示すことになると考えたからである。

[参考文献・資料]

田島利三郎『宮古島の歌』

慶世村恒任『註釋曲譜附 宮古民謡集』(1927年)

慶世村恒任『宮古史伝』(1927年)

島尻実永『伊良部村郷土史』(1940年)

平良彦一『宮古民謡選集』(1953年)

大川恵良『伊良部郷土誌』(1974年)

杉本信夫『沖繩の民謡』(1974年)

仲間弘雅『西原民謡集』(1975年)

- 伊良部村史編纂委員会『伊良部村史』（1978年）
- 外間守善・新里幸昭『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』（1978年）
- 平良市史編さん委員会『平良市史第七巻 資料編5 民俗・歌謡』（1987年）
- 富浜定吉『五線譜のあやぐ』（1990年）
- 日本放送協会『日本民謡大観』（1990年）
- ニコライ・A・ネフスキー『宮古のフォークロア』（1998年）
- 城辺町史編纂委員会『城辺町史第六巻歌謡編』（2000年）
- 「上野村の歌謡」（佐渡山安公氏の採集資料を玉城が翻字 1985年頃）
- 玉城政美「トゥバラーマ〈恋歌〉の分類」（『琉球大学法文学部紀要・日本東洋文化論集（第12号）』（2006年）

玉城政美先生を悼む

2009年1月17日、玉城政美先生が亡くなられた。この『日本東洋文化論集』第十五号に発表した論文「トーガニ（恋歌）の分類」が先生の最後の論文となってしまった。初稿が出た時には既に体調を崩されており、先生自ら校正を行うことができなかった。そのため、原稿の校正は前城淳子が行った。誤字や脱字を訂正するにとどめたが、論文に引用された資料の全てについて、原典に戻って確認することが出来なかった。お許し願いたい。

先生は科学研究費の補助を受けて、平成12～15年度に「奄美沖縄諸島における儀礼歌謡の収集・研究とデータベース化」、平成16～19年度に「沖縄県宮古諸島における儀礼歌謡の収集・研究とデータベース化」というテーマで、儀礼歌謡の収集と研究をなさっていた。奄美諸島、沖縄諸島、宮古諸島が終わり、八重山諸島を残していた。定年退職するまでの残りの4年間を、故郷である八重山の歌謡の収集と研究にあてるはずであった。

12月に病状が悪化し再入院する直前まで、先生は八重山歌謡のデータベース化を進めておられた。玉城ゼミの卒業生が残っていた八重山歌謡の資料を整理して、活用できるようにしたいと思っていらしたようである。また、沖縄国際大学の高橋俊三先生と一緒に取り組んできた「宮古歌謡語辞典」に八重山の歌謡語彙を加えて、「宮古・八重山の歌謡語辞典」を完成させたいとおっしゃっていた。

多くの方が利用しやすいかたちでテキストを作成すること。そしてそのテキストを正確に理解するために必要な索引や辞書を整えること。いずれも膨大な時間と労力を必要とする仕事である。玉城先生は最後までその仕事を続けていらっしやう。そして、私たちにその成果を惜しげもなく与えてくださっていた。

こうしたデータベース化の仕事の一方で、琉球列島に伝承された歌謡一つ一つについて、歌謡の内的特徴（主題や理想、構成、表現手段など）による分析を行い、その結果をまとめる仕事も進めてこられた。歌謡の形態や歌われる場、歌唱者の性格などの外的な特徴とあわせて、琉球の歌謡を、1. 儀礼歌謡、2.

物語歌謡、3. 歴史歌謡、4. 抒情歌謡の四つに分類し、論文にまとめている。先生はこの論文を琉球文学概論の講義のテキストとして使われていたが、毎回修正を加えておられた。一冊にまとめて出版してはどうかと勧めたこともあるが、「まだ手直しが必要だから」となかなか首を縦に振らなかった。

病院のベッドの中でも、琉球文学研究のことが頭から離れなかったようである。お見舞いに伺うと、以前発表した論文「トゥバラーマ〈恋歌〉の分類」と、今回紀要に発表した論文「トーガニ〈恋歌〉の分類」をまとめて『南島の抒情歌』として出版したらどうだろうかとか、今ならもっとうまく書ける気がするなどと楽しそうに話しておられた。

先生の研究に対する真摯な姿勢からは学ぶところが大きかった。その飄々とした人柄は、多くの学生達から慕われていた。再び健康を取り戻され、研究会を開くことを願っていたが、帰らぬ人となられた。今はただ、先生のご冥福を祈るばかりである。

(本稿は2009年1月23日付『琉球新報』に掲載された追悼文に加筆したものである。)

(琉球大学教員 前城淳子)